

おくら うむさうかな。
おます それでな。お嬢さまの命を助けるには、どうしても乳母を見つけにやらねえと云ふだよ。
おくら なるほどな。

おます それでな、長い事とは云はん、一月でもえゝから、他に人が見つかるまで、来てくれる人はないか云うて、伊作が村へ来てゐるだ。この村で、今おつぱいの出てゐるのは、お前と作次郎の女房とたつた二人だよ。だが、作次郎の女房はな、作次郎に悪い病があるよつて、はなから駄目だ、云ふだ。残る所は、お前一人なんだがな。どうだ、お前赤は、おらが育てゝやるからな、十日か二十日か、後の乳母が見つかるまで、行つておくれでないか。

おくら 行きたくねえこともねえだが、何分、赤があんばい悪いでな。

おます そりや分つてるだ。だがな、伊作の云ふにはな、お嬢さまのお命にかゝる事だから、金に糸目はつけん云ふてるだ。来てさへくれゝば、前金で百兩でも二百兩でも出す云ふとるぞ。

おくら (眼の色がかはる) 百兩でも二百兩でも出す云ふんかい。

おます そんなに、驚かんでもえゝだ。別荘の人達の百兩二百兩は、おら達の一兩二兩にも當らねえだ。

おくら (決然として) 百五十兩前金で呉れゝば、おら行てやるだ。

おます (相好を崩して) そら、本當かい。

おくら 本當だとも。百兩百五十兩と云ふと、おら咽喉から手が出るだ。おら家新田の忠右衛門から

船や網を抵當に去年の暮八十兩借りてるだ。それで、家の夫は、海へ出られねえで、道普請の土工へ出てゐるだ。百五十兩なら行つてやるだとも。
おます それやおらも来た甲斐があつた。伊作もどんなに歡ぶか知らねえだ。ぢや、歸つて伊作と相談するからな。そして一刻すると一緒に来るから。
おくら うん、待つてるだ。

(おます去る。おくら、乳を飲まして、赤ん坊を下へ置き、臺所へ行き仕事を始める。醫師近藤来る。背廣を着たまだ三十に手のとどかない青年)

近藤 どうだい、あんばいは何うだい。

おくら 何だか知らねえが、今日はちつたあカツ／＼してゐるやうだ。

近藤 わしが云つた手當はしてやつたかな。湯氣を立てゝもつと部屋を温くしてやらなければいけないぢやないか。

おくら (笑つて) そんな事、おら達の家ぢや出来ねえだ。こんな吹きさらしの家ぢや、温くなり

つこはねえだ。それに、火を起す炭なんかありやしない。御飯は、みんな枯木で焚いてるからな。

近藤 (赤ん坊に、近寄つて診断しながら) おい／＼、あんなに云つたのに、濕布を何うしてしないんだ。困るな、一寸手當が悪いと直ぐ肺炎になつてしまふんだ。こんな小さい裡に、肺炎になると、助りつこはないからな。一生懸命に看病してやらなきや。

おくら おらだつて、附ききりに附いてゐてやりたいだが、海へ行つて蛸の二貫目もは、突いて來な

いと、明日のお米が出来ないんだ。おらの亭主が、グズでな。亭主の働き丈ぢや、親子五人が喰つて行かれねえだ。

近藤 (聴診器を赤ん坊に當てながら半ば獨白のやうに) どうも、いけないな。昨日よりも、ズツと廣がつてゐる。毛細氣管支が、すつかりやられてゐる。……もつと、氣をつけてやらないと助からな

いよ。

おくら でもな、おらが子は、この子で四人だが、一人として死んだものはねえ。少し、あんばいが悪くても、直ぐピン／＼してしまふだ。

近藤 そら、輕症の場合は、さうかも知れないが、かう、こぢらしぢやねえ。濕布位してやることは出来ないか。とにかく芥子を一度貼つて見よう。この家に、芥子があるかね。

おくら 芥子！ 芥子位はあるだ。

(おくら、芥子を取りいだす。赤ん坊、先刻から時々思ひ出したやうに泣く)

近藤 あれば、水と交せて茶碗でとかす。

(おくら、その通りにする)

近藤 それを延べる紙はないかな、

(おくら、黄色くなつた紙片を取りいだす)

近藤 汚い紙だな。まあいゝ。

(近藤手際よく。芥子を紙に延べ、赤ん坊の身體に貼つてやる。赤ん坊、しきりに泣く)

近藤 だん／＼ピリ／＼して来るが、辛抱するんだぞ。

(赤ん坊しきりに泣きつゞける。おくら、乳を飲ませんとす)

近藤 一つ乳を飲ました。

おくら 先刻。

近藤 それぢや、いくら泣いたつて乳を飲ましぢや駄目だ。昨日よく云つたぢやないか、四時間隔きに飲ませると云つて。

おくら だつて、時計があるぢやなし、あれからこれへと仕事をしてゐると、時間のことなんか分りやしねえだ。

近藤 さうだらう。だが、醫者の指圖も少しは聽いてくれないと病氣は癒らないよ。時計がなくなつて、大抵見當が付きさうなものだ。

おくら (口先丈で) あい、分つたよ。

(以前のおますが、別莊番の伊作と三十近い女とを連れて来る)

おます おくらさん、伊作さん連れて来たよ。

伊作 お／＼おくらさん、お久しう。

おくら お／＼伊作さんか、お久しう。

伊作 おますさんから、聽いたが、お前本當に行つて呉れられるかね。

おくら あゝ行くだとも。

伊作 それで、おら大助かりだ。お前を連れて行けば、おらも手柄だな。これは、梅澤さんの女中頭の小幡さんぢや。これから、お世話になるんだから、よく御挨拶して置けよ。

おくら おらはな、お乳が出る丈が取柄で、外の事は何も知らねえだから。

小幡 それで結構ですよ。此方の赤さんも、お悪いやうですね。いけませんね。何時生れたのです。

おくら 去年の十一月ですよ。

小幡 ぢや、お嬢さまと丁度同じ月だわねえ。それで、貴女が来てくれた後は何うするんです。

おくら ……おら達の子は、米の粉や重湯で結構育つだよ。

(近藤、芥子を剥してゐたが、駭いて皆の方を見る)

小幡 やつぱり、生れつきが、丈夫だからですわね。それで、いつから来て下さるでせうかね。三分でも、一時間でも早い方がいゝんですがね。

おくら これの姉が、今磯へ行つてるから、歸つたら直ぐ一緒に行きますだ。明日にでも一度歸らせて貰へるだんべいな。

小幡 お乳の間にさへ合つてくれれば、毎日歸つてもいゝですよ。わづか一里か一里半の路ですもの。

おくら ぢや、おら一寸家の中を片付けて置くべえ。

近藤 おい、おくらさん。お前さん何うすると云ふんだい。

おくら 乳母に出るだよ。

近藤 乳母に。馬鹿な、自分の子があるぢやないか。

おくら 自分の子に、お乳をやつたんぢや金にならねえだよ。

近藤 金になる、金にならんの問題ぢやない。此の子の命の問題ぢやないか。今お前の乳から離して見たまへ。この子は、二三日も生きてゐないよ。

おくら 先生様、何を云ふだ。長男の時の時だつて、おきんの時だつて、おら自分の子は、重湯で育て、乳母に出た。乳母に出ればその時だつて月二十兩になつたからな。

近藤 そらお前、子供が無事に育つてゐる時の事だよ。この子は、肺炎になりかゝつてゐるんだよ。

こんなときに、母親の乳に別れて見ろ、一たまりもないぢやないか。

おくら だが、先生！ おら百五十兩と云ふ金が、ほしいだ。その金があれば、綱が質から出せるだよ。一家六人が、浮び上るだよ。俺は、この子も可愛いだ。だが、百五十兩あれば、一家が浮び上るだ。おら達の子は、丈夫に生れついてゐるから、風邪位では死なしないだ。重湯飲ませたつて死なしないよ。

近藤 (暗然として言葉なく、赤ん坊の衣服を合せてやる)……。

(小幡、おますに何か書く)

おます (近藤に) 先生、あのこの方は鎌倉の梅澤さんから、おいでになつたのです。

近藤 (冷然と) あゝさうですか。

小幡 初めまして。あの鎌倉の梅澤、御存じでございますか、あの梅澤良一の別荘が、鎌倉にござい

ます。

近藤 あゝさうですか。ホンの此間開業したばかりで、鎌倉の容子などは、ちつとも知りません。

小幡 御尤もで、それで、一寸お願ひがあるので、ごさいますが、乳母の候補者がございましたら、

一度所のお医者様に診斷をしていただくやうに、申しつかつて参つたのでごさいます。こんな、お出先でお願ひするのは、大變失禮でございしますが、一寸診斷していただく譯には参りますまいか。

(おくらは、家中をあれこれと片づけるた後、着物を着かへてる)

近藤 (暫く考へた後) お斷りいたしませう。

小幡 (一寸駭いて) まあ。何か、お氣にさわつたことがあるのでごさいますか。

近藤 いや、別に貴女方の態度が氣に觸つたとか觸らないとか云ふのでありません。たゞ、僕はこんな、むごたらしい仕事の手傳ひはしたくないんです。

小幡 まあ、むごたらしい、何がむごたらしいのでごさいます。

近藤 僕は、むごたらしいと云ひますね。こゝに寝てゐる赤ん坊のお乳を、貴女方は、掠て行くんぢやありませんか。

小幡 掠めて行くなんて、人聞がわるい！ ちやんと、百五十圓と云ふ前金で、雇つて行くのでごさいますよ。

近藤 同じことです。百五十圓と云ふ大金を貧乏人に見せるのは、白刃を突きつけるのと同じです。貧乏人は、それに目が眩んでどんな怖しいことでもするのです。

伊作 でも先生、別荘のお嬢さんも今日明日と云ふ御病氣です。人乳があれば、どうにか持ち直すかも知れないと、博士が仰しやるのでごさいますよ。

小幡 ほんたうに、お嬢さまは、大旦那さまには、初めのお孫さんですよ。どんな事をして、お命は取りとめたいと。

近藤 それだからと云つて、人の子の大事なお乳を取つてもいゝと云ふ譯はない。どんな金持の娘さんの命だつて、この赤ん坊の命だつて、同じですよ。醫者の眼から見たら同じですよ。いや誰の目から見ても、同じでなければならぬ筈です。親は、貧乏の苦しきで、承諾はするにしても、神さまが――そんなものは無いにして、物の道理が許しませんよ。

おくら (片付けを了つて) 先生、何云つてるだ。おら、よろこんで行くだ。

小幡 ありがたう。本當に有がたいわ。お嬢様のお命は、懸替がないんだからね。

近藤 今、この子のお乳を持つて行くのは、この子の命を持つて行つて飲むやうなものだ。そんなことをして、育つて行つたつて、そのお嬢さんとやらも行末、いゝことは決してありませんよ。罪もないこの子を、人身御供にするんだから。

伊作 (憤然として) 傍から、彼は云はんやうにして下さい。傍から、ケチを付けるのは、よして下さい。散々尋ねあぐねて、やつと探したんだよ。當人が納得して行くと云ふのに大きなお世話ぢやないか。

近藤 君こそ何を云ふ。傍で黙つてゐたのに、君の方で診斷を頼むから、口を出したくなるんだ。こ

んなひどい不人情な仕事を僕に手傳へと云ふから、つい口を出したくなるんだ。

伊作 ぢや、診斷をおねがひすることは、よしませう。その代り黙つてゐて下さい。鎌倉へ歸れば、博士だつて學士だつて思ふまゝに、来て下さるんだ、田舎の……。

近藤 藪医者か、あはゝゝゝ。だがね、この子には、この母親のお乳の外には、何も持つて生れた物はないんだ。そいつを取つて行くんだから、罪は怖しいと云ひたいんだ。まあ、僕には彼は云ふ權利はないんだ。勝手にしたまへ。そして、金持の薄弱な、ヒヨロ／＼した子供達が、金の力で生き延びるのだ。それもいゝだらう。

(娘の、おきんは入つて来る。小さい銚と桶とを持つてゐる)

おきん お母、こんなでかい蛸取つたぞ。

おくら そんなでかいのが磯に居たのか。

おきん 浅いところにゐたんぢや。

おくら あゝおきん。おつ母は、これから鎌倉へ行つて、明日歸つてくるからな、赤ん坊を見てゐるんだぞ。

おます おらがな、重湯と牛乳とを持つて来てやるからな。そのお金も、ちやんといたゞいて置くからな。

おくら さうかい。そりや、ありがたう。そんなにして貰つちや冥利に盡きるだ。

伊作 ぢや、直ぐ行つて貰ひませうか、下らない邪魔がは入るといけないから。

おくら はあ。お伴しますだ。

(みんな立ちかけようとする。近藤先刻から庭へ下りてゐる)

おくら あゝさうだ。この兒には、當分お乳がやれないか知んねえから、お名残りにやつてちよつくら置くだ。なあ、先生、まだ四時間絶たねえが、飲ませてくれな。

近藤 (暗然として) あゝいゝとも、いゝとも。

(おくら、乳を吸はせる。子供泣き止んで吸ふ)

近藤 (進んで、赤ん坊の頭を撫でながら) おい！ しつかりしろ。死ぬでないぞ。その位なことでは参るなよ。しつかりしろ。しつかりしろ！

おくら 先生、何云つてゐるだ。おら達の子は、なか／＼死にやしねえ。米の粉だつて、結構育つだ。牛乳だつたら、勿體ない位だ。

(以前の兄弟、銘々二人背負ひ切れぬほどの枯木を背負つて歸る)

兄 おつかあ、うんと背負つて歸つたぞ。

弟 見てくれ！ おつ母。

おくら 先生、見て下せえ。二人とも米の粉で育つたぞ。今ぢや、叩き殺しても死なない程に、丈夫だよ。先生、この餓鬼も今にこんなになるだ。はゝゝ……。

震
災
餘
譚

人物

河村吉太郎

年三十三、洋服屋

妻 おとよ

二十六

おしん

吉太郎の母

吉三

彼等の子

およし

おとよの父親。鳶頭

岡野茂助

吉太郎の弟、二十九

吉次郎

弟子

時

大正十二年九月五日

所

小石川區初音町

情景

電車通より、狭き路地を三間ばかりは入りたる家。入口が土間になつてゐる。直ぐ六疊があ

る。ミシン臺大小の型を交へ五つ六つ一隅へ取り片づけしてある。土間にも、腰かけてやる踏みミシン臺を置いてゐる。おとよ、小柄な善良さうな女、蠟燭に火をともし、ミシン臺の上に立てる。灯影で老母のおしんが片隅に坐つてゐるのが分る。午後七時頃、弟子甲斐々々しく身づくろひをし、手に棒を持つて歸つて来る。

弟子 お神さん、朝鮮人が湯島天神の井戸へ毒を入れたので、六十人ばかり死んださうですよ。

おとよ (眉をひそめる) まあ、おそろしいことをするんだね。

弟子 松坂屋が焼けたのも、やつぱり朝鮮人ださうですよ。松坂屋へは、どうしても火が點かないので、前の岡野へ爆弾を投げこんださうですよ。

おしん お、お、怖い！ 怖い！ 此方へも、来やしないかね。

弟子 本郷と小石川丈は、何うも出来ないのが、残念だと云つてゐるさうですよ。

おとよ あんなに下町を焼いときながら、まだ足りないのかしら。

弟子 でも、もう此方だつて、警戒してゐるから大丈夫ですよ。先刻も、こんにやく、閻魔のところまで朝鮮人が一人捕まつたさうですよ。

(その時、家かすかにゆれる。)

弟子 おや、ゆれてゐますね。

おしん 本當にいやになつてしまふね。妾も今年で六十一だけども、こんな恐しい目に逢つたことは初めてだよ。

おとよ 本當に、いつが來たら安心が出来るだらう。まだ電燈は來ないし……水道は出ないし……豆

腐屋さんの井戸は大丈夫かしら……

弟子 大丈夫ですとも。あの井戸は、寝ず番をしてゐるんですもの……お神さん、何か食物はありませんかね。どうもお腹がすいちゃつて……

おとよ あゝさうく。いつか、本所のお母さんに貰つたほしいかがあつたよ。
(おとよ、立つて、箆筒の開き戸棚から、罐を出してやる)

弟子 こいつは、ありがたい！ 少し貰つて置きますぜ。おや、行つて来よう。

おとよ お前今晚は、十二時から先きぢやないのかい。宵の中寝てゐたらどうだ。

弟子 氣が立つてゐて、ちつとも寝られませんか。今日は夜になつたら、通行する人を、一々調べるんですよ。

おとよ 今日もぞろ／＼随分通つたわねえ。一體何處から何處へ行くんだらう。

弟子 春日町へ行つて御覽なさい。この前の通りの三倍位、通つてゐますよ。一旦逃げた人達が、自分の家の焼跡を見に行くんですよ。中には、乞食のやうな恰好をしてゐるのが澤山ありますよ。

おしん 焼けた人達に比べたら妾達は仕合せだね。

弟子 仕合せどころか、お殿さまですよ。親方達は遅いな。今日あたり何とか、手がかりがあればいいですね……さあ、出かけよう。

おとよ お前親方が歸るまでは、あんまり遠方に行かないでくれ。

弟子 大丈夫ですよ。角の薬屋の前に居ますよ。

(弟子出て行く)

おとよ やつぱりお母さんと兄さんは被服廠へ這入つたんでせうか。

おしん さうだね。何んとも分らないけれど、お前の母さんにしろ兄さんにしろ、落着いて居る方だから、案外にたすかつたかも知れないよ。

おとよ ほんたうに、お母さんは何うしてお父さんと手を離れたんでせう。……あゝ孰ちらかにきまつてくれないと、ぢつとして居られませんか。

おしん ほんたうに察しますよ。でも、今日は何とか手がかりがありますよ。

(子供の吉三とおよしと歸つて来る。吉三は七つ位、およりは五つ)

おとよ お前達、どうしてゐたの！ 日が暮れるまで、何處へ行つてゐたの。先刻もあんなに云つたぢやないか、家の前に居なければいけないつて。

吉三 だつて、お母さん。閻魔さまへ炊出しを貰ひに行つてゐたのも。

おとよ (直ぐおだやかになつて) まあ、おむすびを呉れたのかい。

(兄妹、右の手を差し出す。二人とも大きい玄米のむすびを持つてゐる)

おとよ (前よりはずつとやさしく) でも、日が暮れる前には歸らないといけませんよ。

吉三 (うなづく)

おとよ そんなに、大きいむすびなら、一つをお前達二人で半分わけにして、一つの方はお婆さんに

お上げなさい。

吉三 うん。よし子お前のお婆さんにお上げ。兄さんがお前に半分やらう。

(よし子、おしんに渡さうとする。おしんそれをさへぎる)

おしん 妾に？ けつこうだよ。折角お前達が、貰つて来たのだから、お前達でお上り。

おとよ お母さん。いゝぢやありませんか。こんなに、大きいのですもの。

おしん ぢや、半分だけ貰はうかね。お前に、半分上げませう。

おとよ 妾は結構ですよ。

おしん そんなに云はないで、を前も半分お上り。

おとよ さう。ぢや半分いたゞきませう。

(おとよ、おしんの分けたむすびを受取る)

おしん でもかうして、みんなが揃つて、おむすびをいたゞけるなんて、ほんたうにありがたいよ。

おとよ ほんたうに、さうですわね。

吉三 (戸外を見てゐたが) お父さんだよ。

おとよ (そゝくさと立ち上りながら出迎へる) お歸りなさい！ あなた何うして。

吉太郎 (頭を振りながら) 駄目々々。いくら探しても駄目だ。まだお父さんは歸つて来ないか。

おとよ えゝまだ。一緒ぢやなかつたの。

吉太郎 今日は兩國を渡ると、二手に別れて探さうと云ふもんだから、別れたんだよ。

おとよ まあ、さう。

吉太郎 いくら探しても、とても駄目だ。

(上りがまちへ、へたばるやうに腰を下す。)

おとよ (涙ぐんでゐる) まあ！ さう。

吉太郎 今日はお前、兵隊さんに、頼んで被服廠へ入れて貰つて探したが、あれぢや分りつこはないなあ。

おとよ まあ。

吉太郎 十の死骸が、八つまでは黒こげで、男だか女だか年寄だか若い者だか、かいくれ分らないんだもの。

おしん 南無阿彌陀佛く。

吉太郎 被服廠を出てからも、大川の岸をずっと探して見たが、あれぢやとても分りつこはないや。おとよ 明日は、妾が行かうかしら。

吉太郎 俺も、もう二三日は行くつもりだから、お前もあきらめのために一緒に行かう。

おとよ ええ。連れて行つて下さい。

吉太郎 俺達のやうな居職の者は、一日あるくと、とても堪らない。足が木の子やうになつてしまふ。でも、ひきがへるのやうな恰好をして、大川へ流れてゐる佛に比べると、俺達は幸せだよ。おとよ お母さんや兄さんなんかも、そんな恰好をしてゐるのかしら。

吉太郎 そら分らないよ。

おとよ あゝいやだ。いやだ。考へた丈でも、ぞつとするわねえ。

吉三 お父さん、僕死人が見たいな。

吉太郎 何を云つてるんだい。この小僧め！

吉三 水道橋のところに居たつてねえ。

吉太郎 うん、彼處にも四五人ゐたよ。

よし子 お父さん、馬の死人も居るんだつてね。

吉太郎 馬の死人つて奴があるかい、馬の死骸だよ。馬の死骸ならあるよ。吾妻橋の手前に、馬の死骸に石灰をかけてあるので、何うしたかつて、訊いたら、罹災者が肉をすつかり喰つてしまつたので、見つともないから、石灰をかけたんだつて。

おとよ まあ。お腹がすくと、獸のやうになるんだね……さあ、御飯を喰べませうか。

吉太郎 喰べてもいゝが、鼻の先きはまだ死骸の臭が喰つてゐるやうで、飯がのどを通らないや。

おとよ ぢや、少し待ちませうか。私達は、九時に喰べることにしたのよ。

吉太郎 うむ、俺、道で一杯十銭の牛乳と、梨をかじつたので、胸が變につかへてゐる……それよりも、横にならう。お父さんは、遅いね。

おとよ 何うしてゐるんでせう。一人で大丈夫かしら。

(吉太郎、奥へゆく。電道から、さわがしい聲や警笛の音がきこえる)

吉三 おつ母さん。一寸電車通へ行つてもいい。
おとよ いけないつたら。

(吉三、叱られて、つまらなさうに横になる)

よし子 (突然歌ふ) 小さい子! 小さい子! お前は何をしてゐます。
おとよ いけません。こんなときに、歌なんか歌つちや。

(よし子、だまつてしまふ。おしん、南無阿彌陀佛くと、ほのかに唱へる。急に戸外が、さわがしくなる。「此方だ。」此方だ。「此方へつれて来りや分るんだ。」などと四五人聲がする。弟子を先頭に、自警團の人々、銘々に提灯を下げて、一人の罹災民らしい男を連れて来る)

弟子 お神さん。この人知つてゐますか。
おとよ (駭きながら、近づいて提灯の光で見る) いえ知りません。

自警團の人々 それ見ろ! 怪しい。曲者だ! やつつけてしまへ! 警察へ渡せ!

その男 怪しい者ぢやない。本所の罹災民だ。
自警團の人々 ウソをつけ! ぢやなせ、お神さんが知らないのだ。

その男 茲は、たしかに河村吉太郎さんの家ですか。

弟子 さうだよ。俺の家なんだ。ねえ、お神さん、この人が本所から焼出されて此方を訪ねて来たと云ふんですが、お神さん、お存じありませんか。

おとよ 知りませんね。もしや、貴君は岡野芳助の家の人々から、何かことづてを聞いて来たのぢや

ありませんか。

その男 いゝえ、違ひます。私はあるのう。あのあるのう。

おしん (片隅で、ぼんやり聞いてゐたが、この時ふと何かを認めたやうに上りがまちへ近づくと一體

何したの。)

おとよ おつ母さん。貴女、この方しりませんか。

おしん えゝゝゝどの人だつて。)

(おしん、眼鏡を取り出さうとする)

その男 (急に) おつ母さんぢやありませんか。

おしん えゝつ (見つめて) 誰!

その男 吉次郎です! お母さん。

おしん 吉次郎だつて。えゝゝゝ (よく見る。駭く) ほんたうに、吉次郎ぢや。吉次郎ぢや。ま

あ、何うおしだの、まあ何うおしだのえ。吉太郎や、吉次郎が歸つて来ましたよ。

吉次郎 兄さんは、御無事ですか。

おしん あゝ奥に居ますよ。吉太郎や。

自警團の人々 ぢや、やつぱり此方の身寄の方ですね。それで安心しました。さあ、行かう。

(皆去る。弟子、ジロく吉次郎を見てゐたが同じく去る)

おしん まあ、お前何うしたんだい。お前東京に居たのかい。

吉次郎 本所に居たのです。(オド／＼しながら) おつ母さん、兄さんは。

おしん 吉太郎おいで、吉次郎が、歸つて来ましたよ。

吉太郎 (無言のまま出て来る。激しい憎悪の色)……。

吉次郎 兄さん、お久しう。御無事でけつこうです。何のおかはりもなく。

吉太郎 手前は、なぜ歸つて来たのだい。

吉次郎 兄さん、すみません。私が悪うございました。

吉太郎 何がすみませんだい。手前は、お天道さまが、ひつくり返つたつて、歸つて来られた義理ぢやないぞ。こんな地震位で、歸つて来られた義理ぢやないぞ。

吉次郎 よく分つて居ます。兄さんの仰しやることは、一々御尤です。どんなことがあつたつて、この家の敷居を跨がれる義理ぢやありません。でも兄さん、本所被服廠で命から／＼の目にあつて女房子は眼の前で焼死ぬし……。

おとよ まあ……。

吉次郎 外にたよる所がないものですから、それにお母さんや兄さんのお身の上も心配になつて久しぶりで……。

吉太郎 (やゝ意とけて) お前、東京に居たのかい。北海道に居ると云ふことは、聞いてゐたが……。

吉次郎 去年の暮に、東京に出たのです。死んだ父や兄さんに迷惑をかけて、家を飛び出したものゝいゝことがありませんや。でも北海道で、住み込んでゐた料理屋の主人がね、たいへん私に目をか

けてくれましたね、去年の四月に女房を持たしてくれましたのです。そして私が口ぐせのやうに、東京へ歸りたいと云ふものですから、到頭去年の暮に暇をくれて、商賣の元手として七百兩ばかり呉れたのです。

おしん それで、お前東京へ歸つて来たのかい。

吉次郎 さうです。去年の暮に歸つて、本所へ小料理屋を出しまして、この頃ではやつと得意も出来

どうかかうか店らしくなつて来ましたので、一人前になつたら兄さんの所へ詫びに来ようと思つて

そればかりを楽しみにしてゐると、今度のさわざでせう。女房と今年の春生れたばかりの男の子を

ムザ／＼と眼の前で殺してしまつたのです。(……とすゝり泣をする)

おとよ まあお氣の毒ですな。貴君も被服廠ですか。私の里の母も兄もやつぱり被服廠ですよ。父丈

母や兄と別れて、被服廠へ行かないで、兩國橋を渡つて、逃げたものですか。助かつたのです。

吉次郎 なるほど……あゝ貴女は、嫂さんですか、初めまして、私は吉次郎です。もう八年ばかり前

に、兄貴にも父さんにも不義理をして、家を飛び出したものです……どうぞ嫂さん、何分ともによ

ろしく。

おとよ なあに、そんな御挨拶には及びませんよ。こんなときには、他人だつて助け合ふんですも

の。まして、親兄弟ですもの、いくら不通だと云つたつて……ほんたうによく来て下さいました

ね。さあ、どうぞお上りなさい。

(吉太郎 黙然としてゐる)

219

吉次郎 ねえ兄さん。貴君は、まだ氣持が悪いかも知れませんが、どうぞ堪忍してやつておくんなさい。もう、私も來年は三十でさあ。女房子を持つて、地道に世の中を渡らうと思つてゐた出鼻を、この地震でせう。少しばかり出來かゝつてゐた家財道具もめちやくちやで、スツカラカンになつてしまつたのです。その上、二十二になつたばかりの女房と誕生日も來ない忤とが、私の目の前。あゝいけない！ いけない！ (眼の前の怖い幻影を振り拂ふやうにする)

吉太郎 手前改心してゐたと云ふのは、本當かい。
吉次郎 本當ですとも兄さん。私が、どんなに地道に働いてゐたかを、兄さんに見せたかつた位ですよ。

吉太郎 本所は、何處だつた。

吉次郎 え、龜澤町……。

おとよ おや、龜澤町……ぢや、妾の里の近くですわねえ。

吉次郎 (少しく狼狽して) さうですか。貴君のお家も龜澤町ですか。何丁目ですか。

おとよ 貴君のお宅は……。

吉次郎 私の家ですか……え、と、交叉點がありますね。

おとよ え、ありますよ。

吉次郎 あれから錦絲堀の方に向つて行くと……。

おとよ 右側ですか、左側ですか。私の家は右側ですよ。

吉次郎 私の家は左側の横丁ですよ。

おとよ ぢや、横田と云ふ寫眞屋さんの横丁ですか。

吉次郎 さうです。さうです。寫眞屋の横丁です。

おとよ ぢや、私の里の向横丁ですよ。彼處に小料理屋が出來てゐたとは氣がつきませんでしたわねえ。

尤も妾は今年になつて、一二度しか行かないんだから。

吉次郎 ほんたうに、嫂さんの里があつた近所にあると知つたら、直ぐに御挨拶に出るのでしたのに失禮しました。

おとよ それは、お互ひ様ですよ……。さあ、どうぞお上りなさい。

吉太郎 吉次郎。

吉次郎 はい。

吉太郎 手前よく聞いておけ。父さんが死ぬときには、あんな不孝ものは、たとひ俺が死んだ後でも一足でも家の敷居を跨がすことぢやねえと、繰り返して云つたんだ。手前、さう云はれたつて文句

はないだらう。

吉次郎 尤もです。

吉太郎 が、手前も、地道に世の中を渡つて行かうと云ふ出鼻を、この地震でめちやくちやに叩きつ

ぶされて、親に泣きよりと、泣き込んで來たからには、今度丈は勘辨してやらう。

吉次郎 兄さん、ありがたう。ありがたう。

吉太郎 手前が身の振方が着くまでは、置いてやらう。その代り、以前のやうなことが一寸でもあると叩き出すよ。

吉次郎 はい。解りました。よく解りました。

おしん (欣んで) それでもよく無事で歸つて来ましたね。妾も北海道に居ることゝはかり思つてゐたんだよ。

吉太郎 井戸端へ行つて、足を洗つて来い。少し遠いぜ。あゝ吉三、お前案内してお上げ。手前一人で井戸端なんかをウロ／＼してゐると、また自警團にとつゝかまつちまふ。

吉次郎 本當に、先刻はびつくりしました。白刃を突きつけるのですから。

吉三 伯父さん、此方だよ。水道が出ないから、井戸までは半町もあるんだよ。

(吉次郎と吉三と出てゆく)

おとよ あれが、いつか云つてゐた弟さんですか。

吉太郎 極道で仕様のない奴だつたんだが……。

おとよ でも、不思議ですわね。里の直ぐ近所に店を出してゐたなんて。

吉太郎 (黙つてゐる)……。

おしん ほんたうに頼もしいですわね。

(おとよの父茂助歸つて来る、絆纏を着た五十五六の元氣な老人)

おとよ お父さんお歸りなさい。

吉太郎 お歸りなさい。

茂助 (だまつてうなづく)……。

おとよ どうして何か手がかりがあつて……。

茂助 駄目だ。駄目だ。

吉太郎 お父さんの方も駄目でしたか。

茂助 念の爲めに、枕橋の方を探して見たが、駄目だつた。やつぱり被服廠かな……あの途中で黒こげ

になつたんぢや、分りつこはないや。

おとよ そんなことはありませんよ。今もねえ、宅の長い間不和になつてゐた弟さんが、やつぱり

被服廠へ駆け込んだが、お神さんや子供さんは焼け死んだけれども、御自分は、助かつたと云つ

て、たよつて来たのですよ。

茂助 そいつは……そんな運のいゝ人もあるんだな。(吉太郎の方へ向いて) そいつはおめでたう。

おとよ それがね、ちよいとお父さん。家の向ふ横丁ね。寫眞屋さんの横丁で、小料屋を出してゐた

んですつて。

茂助 あすこには、小料理だつて……。

吉太郎 そんな家がありましたかね……。

茂助 えゝと……そいつは……いつからです。

吉太郎 去年の暮からですつて。

茂助 そんな筈はないな。あの横町は、袋になつて、十軒ばかりしか家がありやしない。それに、地震の直ぐ後に、俺は商賣柄一軒々々、見舞を云つて歩いたんですからね……。

おとよ 横町が違つてゐるのぢやないかしら。

吉太郎 たしかに寫眞屋の横町と云つたぢやないか。

おとよ たしかにさう云つたわね。

茂助 あの横町は、踊の師匠が一軒あるばかりで、後はしもたやばかりだが、そいつは不思議だね。

吉太郎 (考へ込んでゐたが、憤然とする) おのれ! まだ根性骨が直つてゐない! (立ち上らうとする)

おとよ (すがりついて止める) どうしたのです、あなた。

吉太郎 あの野郎。このドサクサまぎれに出鱈目を云ひやがつて、俺の家へ歸つて來ようとしてゐやがるんだな! まだ根性が曲つてゐやがるんだ! 畜生! 叩き出してやる。

(夜警に用ゐるらしい木剣を取り上げる)

おとよ だつて、それやお前さん、横町が違つてゐるかもしれないよ。

茂助 本當だ、こんなときだ。みんな氣が轉倒してゐるんだ、考へ違ひ思ひ違ひだ。

吉太郎 先刻、なんだか言葉をごまかしてゐると思つたが、あいつの昔からの出鱈目なんだ。自分の住んでゐる處を思ひ違へるなんて、そんなべらばうなことがあるものか。野郎、北海道あたりで喰

ひつめやがつて、擧句の果に出鱈目を並べて、ドサクサにつけ込んで歸つて來ようとしやがるんだ

何が被服廠だ! 何が女房子だ!、馬鹿にしてやがら。歸つて來て見ろ、叩き出してやる。

茂助 俺が云つたことから、そんな事になつちや、俺の立場がなくなるぢやありませんか。まあ、もつとよく落着いて、他人だつて仲をよくする際だから。

吉太郎 だつて、出鱈目もほどがあるぢやありませんか。着物は汚いが、ちつともやつれてゐないと

思つたら、被服廠どころか、何處に居つたのか分りやしない。

おしん (オロ／＼してゐたが) でも吉太郎。小料理屋をやつてゐたのが嘘にしても、やつぱりお前、妾達の身を案じて何處からか來てくれたのだよ。いくら義絶になつてゐても東京大震災だと云ふことを聞いて、私達の身を案じて歸つて來たのですよ。

おとよ さうですわ。ほんたうに、おつ母さんの仰しやる通りですよ。

茂助 さうだとも、そんなに惡氣があつて、こんな所に飛び込んで來る譯はないや。

おしん それが、お前、普通では足踏みが出來ないもんだから、あんな嘘を吐いたのですよ。あの子は、嘘つきでなまけもんだけれど、さう惡氣のある子ぢやありませんよ。

吉太郎 だつて、おつ母さん……。

茂助 まあ、いゝぢやありませんか、吉太郎さん。この地震で、俺等初め、世間の人達は、懸換のない親兄弟を失くしてゐるんですよ。お前さん丈ぢやないか、この地震で兄弟が出來たのは。

吉太郎 ……。
茂助 今度の地震で親兄弟の情愛のありがたいのが、皆分つたのぢやないか。弟さんだつて、東京

全滅と聞いて、お前さん達の安否が氣になつて飛んで歸つたのだよ。

吉太郎 ……

(この時、吉次郎と吉三と一緒に歸つて来る。初対面の叔父甥は、もうかなり親しくなつてゐる)

吉三 叔父さん、それからその馬を何うしたの。

吉次郎 さうさ、群集の中を荒れるもんだから、女子供などはおどろいてきやつく泣き出すんだらう。

吉三 それで…。

吉次郎 だから、叔父さんが荷物を放り出して、その馬に飛びついて、やつと四足を縛つて倒したんだ…。

吉三 ほう…叔父さん、偉いなあ。恐くなかつたの。

吉次郎 叔父さんは、北海道の牧場で、何百疋と云ふ裸馬を手がけたことがあるんだもの…馬なんか、犬ころのやうにしか思はないや…只今。

(吉次郎皆に挨拶する)

おとよ お歸りなさい。

(一座白けて、おとよの外誰も挨拶しない。吉次郎は、茂助に一寸目禮した後、上りがまちに腰をかける)

吉三 (叔父にまつはりながら) それから、被服廠へ這入つたの。

吉次郎 さうだよ。被服廠の中が、また大變だつたよ。

吉三 なんだつたの。

吉次郎 とても、お話にはならないよ。黒い煙で、一間先が見えないんだよ。旋風が吹いて来る度に眞赤に焼けたトタン板が、何枚もくくビューく飛んで来るんだよ。それが、人の首に當ると人間の首がスツ飛んでしまふんだよ。

吉三 ほんたう?

吉次郎 ほんたうだとも。叔父さん嘘なんか云はないよ。

吉三 旋風つてこはいの?

吉次郎 恐いとも、人間がビューく木の葉のやうに吹き飛ばされるんだよ。

吉三 自動電話が、空へ捲き上つたつて本當!

吉次郎 自動電話どころか、自動車が捲き上つたんだよ。

吉三 運轉手が乗つてゐたの…。

吉次郎 (ドキッとして) 乗つてゐたとも。

吉三 お客は!

吉次郎 お客なんか乗つてやしない!

吉三 先刻、一間先は黒煙で見えないなんて、そんなもの丈は見えるの。

吉次郎 (ヘドギマギして) そら、お前…そらお前…旋風で黒煙が吹き拂はれてしまつたんだ…。

(みんな苦い顔をして聞いてゐる)

おとよ 吉三、早く行つてお寢。よし子は寝てしまつたんだもの。

吉三 だつて、被服廠のこと、もつと叔父さんに話して貰ひたいんだもの。

茂助 貴君が弟さんですか。俺は、このおとよの父です。初めまして。

吉次郎 初めまして。

茂助 大變御近所に住んで居られたやうなお話ですが、ちつとも知らなかつたものですから。

吉次郎 いゝえ、手前こそ。

茂助 今さう云つてゐるのですよ。この地震で親や兄弟を失くしたものが多いのには、疎遠になつてゐ

た兄弟が廻り合ふなんて、どんな目出度いことだか分りやしないつて。

吉次郎 ほんたうですとも。私は、東京へ歸つて商賣をやつてゐたものゝ、親兄弟に會へないのが、

どんなに心細く思つてゐたか分らないのですよ。それが、この地震で詫びが叶つて、こんなうれし

いことはありませんや(涙ぐむ)。地震前から心を入れ替へてゐたのですが、この地震ですつかりや

り直すつもりですから、父さん貴君どうぞ、兄貴同様お心やすく。

茂助 ようがすとも。

吉三 叔父さん、それからどんなことがあつたの……。

吉太郎 吉三、ねろつたら。

(吉三、ベソをかきながら奥へゆく)

吉次郎 兄さん私は、どんなことでもやりますよ。どんなことでも……。

(弟子あわただしく歸つて来る)

弟子 親方。とても手が足りないんですよ、もう一人出てくれろつて。

吉太郎 よし、疲れてゐるけれども……。

(立ち上らうとする)

吉次郎 兄さん。私が行きますよ。私にやらせて下さい。

吉太郎 (黙つてゐる)……。

吉次郎 兄さん私にやらせて下さい。その木刀を借して下さい。

吉太郎 (先刻の木刀をまだ持つてゐる。暫く考へてから) これかい。(かしてやる)

吉次郎 (弟子に) さあ行きませう。

(二人出て行く)

おとよ でも吉次郎さんは、疲れてやしないかしら。被服廠で……。

吉太郎 馬鹿! お前まで、そんなことを信じてゐるのか。

おとよ おほ……、かすかに笑ふ) でも直ぐ役に立つてくれるわねえ。

茂助 さうだとも、地道に働く男手ならこれからの東京で、いくらでも入用だよ。一寸面倒を見てや

りや、直ぐ一本立になれるよ。

吉太郎 あいつは単衣一枚だつたな。おとよ俺のシャツでも持たしてやれ。

おとよ はい。

(奥へゆく)

おしん 私わたしはこれで何なにだか心こころ丈夫ぢやうぶになりましたよ……。おやまた揺ゆれてゐるのではないかね。
(三人天井を仰ぐ)

—幕—

世 評 (A Morality)

——よしと云ひあしと云はれつ難波がたうきふししげき世を渡るかな——

人物。時。所。

凡て知れず

情景一

路のほとりに緑の草の生えた廣場があり、その廣場に一群の隊商が休息してゐる。遠景にアラビア風の都會。隊商の中に、隊長 覺しく骨路逞しき老年の男がゐる。妻を伴つてゐる。妻は楚々として美しき女。隊商を圍んで多くの見物人が居る。見物の中女幾人とも知れがたし。

見物の男一 何處から何處へ行く隊商だ。

男二 知らない。つひぞ見知らない人種だ。

男三 いや、俺は知つてゐる。この人達は西の方から來たのだ。

男一 西の方からつて。

男三 西方の國からだ。紅海に近いツクセン人だ。

男一 なるほど。道理でみんな色が黒い。

男二 だが、あの隊長の妻は美しいな。バグダットにだつて、あんな美しい女はゐない。

男五 少しお出額だが、聰明そのものと云つた顔だ。あの眸、理智に輝いてゐる美しさつたらない。

俺は、あんな女を妻にほしい。

男三 あはゝゝゝ。あの女は、ツクセン人ぢやないんだ。あの女はバグダットの貴族だ。

男一 なに貴族だつて。嘘を云つちや困る。貴族の娘が、どうしてあんな隊長の妻になつたのだ。

男三 それは、お前バグダットでも評判になつた話だ。あの娘の兄が、あの娘を賣つたのだ。

男一 なるほど。可哀いさうに。

男三 五つのダイヤモンドと六つの黒眞珠とが、あの娘の價だつたと云つてゐる。

女一 可哀いさうに。貴族の娘に生れながら、賣られるなんて、ほんとに不幸せな方ね。

女二 おや！ 御覽。あの女が足を動かしたよ。おや、足に何か光る物が付いてゐる。おや！、鎖だ

鎖だ！

女三 銀の鎖だよ。

女四 裝飾品のやうに、手綺麗に美しく出来てゐる。でもやつぱり鎖は鎖だわね……。

女五 でも、胸にあんな美しい胸飾りを付けてゐる。

女六 でも、鎖が足に付いてゐるには、可哀いさうだわねえ。

女一 悲しうにしてゐるわねえ。涙が絶えず溢れてゐるやうな眸をしてゐるわね。

女四 可哀いさうに。あれでは妻だか女奴隷だか分らないわねえ。

男三 もう、金で買つた丈に、安心が出来ないんですよ。それに年が親子程にも違ひますからね。

女二 いくら違つてゐませう。三十は違つてゐるでせう。

女三 そんなでもないわ。女だつて、もう二十四五にはなるわ。

男一 もう、五十を越してゐるくせに、あんな若い女房をつれ廻していやらしい老爺だな。

女一 金で買はれて、あんな老人の妻になるなんて、考へた丈でも身ぶるひがするわ。

女二 でも御覽なさい！ 耳輪にも、ダイヤモンドが光つてゐますよ。それにあの老人だつて、それ

ほど邪険でもなささうよ。

女三 まあ、あんなに足に鎖が付いてゐるには、本當に愛なんかありつこはないわ。

女四 氣の毒ね、一生あんな境遇に過すなんて。

男三 貴女方が同情する以上に、あの女は自分の境遇を嘆いてゐるのですよ。

男二 いゝ女だな。あんないゝ女が、あんな老人の妻になつてゐると云ふ丈でも、義憤を感じるよ。

男三 おい、あまり大きい聲を出したら困るよ。自分のことが、噂になつてゐることを感づいて眞赤

になつてゐるよ。

男一 我々が同情してゐるのを知つて嬉しいだらうか。

男三 勝氣な女だと云ふから哀れまされると云ふことに、いゝ感じはしまい。でも嬉しくなくもないだ

らう。

女一 おや亭主の老人は、立ち上りましたね。

女二 ノソノソとどつかへ歩いて行きますね。

女三 なに用足しに行つたのでせう。

女四 でも、ホンの少しの間でも、あの美しい女の傍に醜い老人の亭主が居ないと云ふことは、うれ

しいことだわねえ。

女一 氣のせむか、あの女の顔色がはれ／＼としましたね。
 女二 おや。あの女の人も立ち上りましたね。
 女三 おや。身づくろひをしますね。
 男二 おや歌をうたふのだよ。
 男三 あの女は、バグダットの貴族社會でも有名な歌ひ手だよ。

(皆きゝ惚れる)

女四 おゝ、何と云ふいゝ聲だ。
 女五 うつとりするやうないゝ聲だ。
 女一 一つ一つの言葉が、あの人の悲しみで、裏づけられてゐる。
 女三 何だか文句が、はつきり分らなかつたね。
 男三 身體は賣つたが、わが魂はソロモンの富を以てしても、賣らないとかう云つてゐるのです。
 女達 尤もだわねえ。同情するわねえ。ほんとに可哀さうですわねえ。
 男一 おや、また何か歌つてゐるな。
 男四 いゝ聲だ。ふるひ付きたいやうないゝ聲だ。
 男三 金錢の戀、偽りの愛を捨て、本當に眞心で自分を愛してくれる青年の胸に懐かれないと云ふのだ!
 男一 尤もた。

男二 俺が救つてやる。
 男五 いや俺が救つてやる。
 男四 いや俺が救ふ。
 男一 その鎖を斷つてしまへ!
 男五 あの老人を踏みつぶしてしまへ。
 男二 今宵の中に逃げるといゝ。俺は、天幕の陰で貴女が逃げて来るのを待つてゐる。
 男三 いや、靜に、老人が歸つて来る。老人が、そんなことを聴くと、どんなに警戒するかしれない。
 しづかに。
 女一 亭主が、歸つて来ると美しい顔が、直ぐ曇つてしまふ。
 女二 おや、あんなにしをれて、しやがんでしまつたよ。
 女三 可哀いさうに、いつまであんなに囚はれてゐるのかしら。
 女四 思ひ切つて、鎖を切つてしまへはいゝのに。
 女五 本當に、あの人の歌つてゐる通りにすればいゝに。
 女三 ほんたうに、誰か本當に愛して呉れる青年の胸に飛び込んで行けばいゝに。
 女二 本當に。何だつて、はやくあの鎖を切つてしまはないのかしら。

情景二

情景。一と同じ。たゞ前よりも一年ばかり後。やつぱり一群の隊商が休んでゐる。群衆が

遠くから取り巻いてゐる。群衆は、第一場の人々と全く同一なり。

女一 去年評判になつた隊商の妻が、通つたと云ふから追ひかけて來たのですよ。

女二 わたしも。

女三、四 わたしも。

男一 うむ。去年評判になつた女が居ると云ふんだね。

男二 うむ。あゝ、あれだ、あれだ。ほら、あのつくぼつてゐる駱駝にもたれながら赤ん坊をあやし
てゐる女が、たしかにあれだ。ホラ今顔を上げた。

男四 なるほど、違ひない、見覚えのあの美しい顔だ。

女一 可哀さうに、あの嫌な亭主の赤ん坊を生んだのかしら。

女二 でもあの亭主が見えないわねえ。

女三 ほんとに。

女四 私先刻から、亭主を探してゐるのよ。

女五 見えないわねえ。何うしたのだらう。

男一 おい、あの女の傍に若い男が居るぢやないか。

男二 うむ、同じ駱駝にもたれてゐるね。

男四 それに見ろ！ あの女の足には、銀の鎖が付いてないぜ。

男女達 おう、おう、なるほど。なるほど。

女二 到頭、あの鎖を断つてしまつたんだわねえ。

女三 あの嫌な年寄の亭主から逃げたんだわねえ。
男三 (何處からか現はれる) お前さん達は、まだあの女の話を知らないんだねえ。あの女が、若い
男をこさへて、あの年寄の隊商を捨てた話を。

女達 まあ。まあ。
男三 随分、思ひ切つて逃げてしまつたんだよ。

女達 まあ。
男二 あの横に坐つてゐる男が、それなんだねえ。畜生！ うまくやつてやがらあ。

男四 あんな生若い小僧のくせに。
男五 女よりも年下ぢやないか。生意氣に。

女一 まあ、到頭亭主をうつちやつたんですつて。

男三 しかも、女の方から手きひしい絶縁状を送つたんだよ。

女二 まあ、あんまりやり方がひどいわねえ。
男一 ほんたうだ。男と云ふものを馬鹿にしてゐる。女から絶縁状を送るなんて。

男二 ほんたうだ。しかも、人もあらうに、あんな年下の小僧とくつゝくなんて。

男四 それに、あの赤ん坊だつて、あの小僧の子だらう。

男一 さうだらうとも、いけづうくしい女だ。

女達 まあ。

男二 あの横に坐つてゐる男が、それなんだねえ。

男四 あんな生若い小僧のくせに。

男五 女よりも年下ぢやないか。生意氣に。

女一 まあ、到頭亭主をうつちやつたんですつて。

男三 しかも、女の方から手きひしい絶縁状を送つたんだよ。

女二 まあ、あんまりやり方がひどいわねえ。

男一 ほんたうだ。男と云ふものを馬鹿にしてゐる。女から絶縁状を送るなんて。

男二 ほんたうだ。しかも、人もあらうに、あんな年下の小僧とくつゝくなんて。

男四 それに、あの赤ん坊だつて、あの小僧の子だらう。

男一 さうだらうとも、いけづうくしい女だ。

女一 ほんたうに。それぢや、あの亭主が可哀さうだ。
 女二 ほんたうに。年寄で、いやな男だつたけれども、何だか實意のありさうな男だつたわ。
 女三 さう。わたしもさう思つてゐたの。何だか頼もしい深切な男らしかつたわ。
 女四 さうですとも。だから、あんなに立派な胸飾りや、ダイヤモンドの耳輪なんかをさせて置いたんだわ。

女一 ほんたうにね、いくら愛がない結婚だからと云つて、亭主は亭主ぢやないの。
 女二 さうですとも。亭主の顔を蹂躪つてあんな若い男と、一緒になるなんて、ひどい女だわねえ。
 女三 さう云へば、初めからそんな薄情者のやうな氣がしたわねえ。
 女四 よく恥しくもなく、子供までつれてこんな所を通れるわねえ。
 女五 そつと、隠れてゐるのなら、まだしも、男と同じに、一緒に駱駝にもたれてゐるなんて。
 女一 薄情者！ 人でなし！
 女二 あの捨てられた年寄の亭主が可哀相だわ。
 女三 ほんたうだわね。

男一 ほんたうに、ぶう／＼しい女だ。バグダットの役人達に渡してしまふといふんだ。まぎれもない、姦通ぢやないか。この女の兄貴の貴族と云ふのは、どんな面をしてゐるのだ。
 男二 こんな女が出れば、こんな女を許して置けば、世の中が滅茶々々になつてしまふ。
 男四 ほんたうだ。うんと、とつちめてやるといふんだ。

男三 可哀さうに、みんなの聲が聞えると見えて、モデ／＼してゐるよ。
 女一 いゝ氣味だわ。もつと、の／＼してやりませうよ。薄情者！
 女二 浮氣者！
 女三 人でなし！
 男三 到頭。ぢつとして居られなくなつたと見えて立ち上つたよ。
 男一 そんな泣顔を見せたつて駄目だよ。
 女一 もうその手には乗らないわ。
 女二 いくら悲しさうな顔を見せたつて駄目よ。
 男三 でも何か歌ひ出したよ。
 女三 きかない／＼。
 女四 ほんたうに誰が、きいてやるものか、亭主を蹂みにじつた女なんかの云ふことを。
 男三 金錢の戀、偽りの愛を捨て、本當に自分を愛して呉れる青年の胸に走つたと歌つてゐるんだ。
 男一 圖々しい！ そんなことを云つてゐるのか。
 女一 あきれたわねえ。
 女二 ひどい女！
 男二 ふてえ女だ。
 男四 べらぼうめ！ 人を馬鹿にしてゐる！ (石を一つ投げる)

男一 ひどい奴だ！ こいつを喰へ！
 女達 ほんたうに。あきれた人だ！
 男達 やつてしまへ！

(男達、女達、銘々に石を投げる。女悲しげに歌ひながら、石に打たれてみたが、それが一つ眉間に當る、とくづれるやうに倒れてしまふ)

男達 ぞまを見ろ。いゝ氣味だ。

(石、子供に當る。子供悲鳴をあげて倒れる。男達また石を投げつゞける。女達、さすがに手を止める)

女一 到頭うちごしらやられしまつたわねえ。

女二 でもこんなひどくやられると、また何なにだか可哀かわあいさうだわねえ。

女三、四 ほんたうにねえ。

—幕—

夫
 婦

人物

おしん

その夫 重吉

その子 おまち

旅の若き男女

手代風の男

その他の

時

明治十五六年頃

所

中仙道の宿に近き峠

峠の頂上に在る茶店。四月の終なれど、山國なれば正に春酣なり。雪をいたゞける連山が見える。茶店の軒には、桃が咲いてゐる。時々春らしい鳥の聲が、きこえる。茶店には、駄菓子と、ゆで玉子とわらぢ、など置いてある。幕開く、おしん店先で絲車を引いてゐる。うらゝかな朝日が當つてゐる。重吉田舎の遊び人らしい風をして、ぶらりと歸つて来る。おしん、見て見ぬ風をする。重吉

おしん いゝえ、買つて呉れたなんて……。
 手代風の男 生涯の事ですよ、思ひ切つておいでなさい！ 待つてゐますから。其處が見切りです
 よ。

（男去る。おまち、先刻から歸つて來てゐる。手代風の最後の言葉を聴く。おしん考へ込んでゐる）

おまち お母さん、何處かへ行くの。

おしん……いゝえ、もう決して何處へも行きません。

おまち ぢや、お父ちゃんと三人でゐるの？

おしん あゝ、三人でいつまでも居るのです。……おゝわらびが、そんなに大きくなつたの。煮て

お父さんが歸るまで、置いといて上げませう。

——幕——

時の氏神

人 物

相 良 英 作

年三十位。貧しき小説家

同 妻 ぬい子

二十四、五

杉 本 芳 子

ぬい子の従妹。ぬい子と同年位

時

今 日

所

東京の郊外

情 景

相良英作の家、若葉の茂れる森を背景とした三間ばかりの家。玄關が二疊、その次ぎが四疊半、その次ぎが六疊。二疊の玄關は見えない。六疊の奥の壁には、大きい書棚があり、洋書と和書とが、半分づゝ位並べられてゐる。縁側近く机を出してある。机は、商賣柄紫檀である。主人の相良英作は、机の横に、座蒲團を四つに折つて枕とし、ねそべつてゐる。

四疊半は、細君の居間である。奥の壁に三つ重ねの箆笥が一つ立てかけてある。箆笥の右に衣架があり、二三枚の着物と、色のあせた夏外套などかけてある。箆笥の左横に障子があり、臺所へ通ずる。ぬい子、自分の着物らしい冬物をほどいてゐる。時々、障子越しに六疊間の方を氣にしてゐる。英作は、いつまで経つても寝てゐる。

(出かゝつてから、ふと氣が付いたやうに)

ぬい子 さうく、瓦斯を點けたまゝにしておいた。

(ぬい子、臺所の方へは入る。その時、玄關に女の聲がする)

×× 御免下さい！ 御免下さい！

(英作、ぬい子が出て来るかと待つてゐるが出て来ない)

×× 御免下さい！ 御免下さい！

(ぬい子、まだ出て来ない。英作、一寸臺所をのぞいたが、ぬい子の姿が見えないらしいので玄關へ出る)

英作 あゝ、何方ですか。

×× あの、此方は相良英作さんのお宅ですか、小説家の？

英作 えゝさうです。

×× あの、ぬい子さんいらつしやいますか。妾、杉本芳子です。

英作 あゝさうですか。あの横濱にいらつしやる？

芳子 えゝさうです。

英作 あゝさうですか、一寸お待ち下さい。

(英作、四疊半へ歸つて來、臺所をのぞき込みながら、叫ぶ)

英作 おい／＼。お客様だぞ。

(ぬい子あわてゝ出て來る)

ぬい子 どなた？

英作 横濱の芳子さん。

ぬい子 (當惑と駭きとの表情で) まあ、芳子さん！

(あわてゝ風呂敷包みを押入にかくし、玄關へ出る)

ぬい子 まあ。

芳子 まあ。

ぬい子 よくいらつしやいました。妾、駭いてしまつたわ。

芳子 随分、しばらくでしたねえ。もう、三年位になりますわ。

ぬい子 さあ、どうぞ。

英子 失禮させていたゞくわ。

(芳子上つて來る。見ると、ぬい子を作つたのと同じ位の風呂敷包みを持つてゐる)

ぬい子 ほんたうにしばらくでしたわねえ。御機嫌よろしう。いつも御無沙汰ばかりで。

芳子 いゝえ、妾こそ。お變りなくて結構ですわ。

(英作、モチ／＼してゐたが、挨拶する)

英作 僕が相良です。初めまして。

芳子 初めまして、お名前は、兼々承つてゐました。

ぬい子 ほんたうに、一度尋ねて來て下さればいゝと思つてゐましたの。

ぬい子 ぢや、これから何うなさるおつもりです。
芳子 東京に何か職業はございませんでせうか。

(ぬい子黙つてゐる)

英作 (ぬい子に) お前、何か心當りがありさうだね。よく、職業婦人になると云つてゐるぢやないか。

ぬい子 (苦笑しながら) 心當りなんか無いわ。

芳子 妾、何からでもして行きたいと思ひますの。女中でも、何でもいゝのです。

ぬい子 よく新聞の案内欄などに、いろ／＼廣告が出てゐるやうですけれど、いざとなると何々いゝのがございませんやうですわねえ。

芳子 雑誌の編輯の手傳と云ふやうなものはございませんでせうか。妾、此方へ伺へばそんな口があるかと思ひましたの。

英作 (苦笑しながら) そんな口は、なか／＼希望者が多いんですからねえ。

ぬい子 職業婦人、職業婦人などよく云ひますが、いざとなるといゝ口はございませんわ。

芳子 でも、妾根よく探せば、ないことはないと思ひますわ。そして、どんな口でも見つかつたら、それにかじり付いて、一生懸命に自分の生活を切り拓いて行かうと思ひますの。

ぬい子 そりやねえ、何でも一心におやりになると……(氣のないやうに、中途で云ひ止む)

英作 だが、御主人はそんなにいけない方ですか。

芳子 いけないつて。

英作 つまり問題は、貴女を愛してゐるか否かの問題ですね。貴女を愛してゐないんですか。

芳子 (誇を傷けられた如くに昂然として) いゝえ、そんなことございませんわ。

英作 貴女を愛していらつしやるなら、問題ないぢやありませんか。

芳子 でも、今日なんか随分ひどいことを云ふんですもの。出て行くなら出て行けゆけ、勝手にしろなどと云ふんですもの。妾口惜しくつて。

英作と、ぬい子と顔見合はして苦笑す)

英作 でも、それは貴女が何か云つたからぢやありませんか。

芳子 えゝそれはさうですわ。

英作 それ御覽なさい。男と云ふものは、やつぱり男としての意地がありますからね、女房から何か云はれると、男の意地として、つい心にもなく過激なことを云つてしまふのです。僕なども、さうですよ。原稿が書けなくつて、むしやくしやしてゐる時、此奴が傍から何か云ふと、癪に觸つて殴つたりなんかするんですよ。出て行け、勝手にしやがれなんてよく云ふんですよ。そんな時は云はずに居られないんですよ。だが、それで女房の方が、飛び出すとするでせう。普通ならば、二三日も経てば歸つて来るですね。だが、人生と云ふものは偶然と云ふものが、悪戯をやりましますからね。貴女の場合を例に取りますがね。一時の感情からいみ合つて、お家を出るでせう。心の底では別れる氣は少しもない……。

芳子 あら、少しもないことありませんわ。
 英作 まあ、ある程度あるとしてもいいですよ。亭主が血眼になつて探してゐるのが分つたら歸つて来よう。そんな氣で、家を出るとしますよ。だが、貴女の場合は、茲まで無事に來られたから、やうなもの、若し途中の電車の中位で、深切さうな男からでも話をしかけられるでせう。家を出て、むしやくしやしてゐるし、寂しいし、つい甘い言葉をかけられると、その男に頼る氣が起るでせう。

芳子 あら、そんな事ないわ。そんな浮ついてゐるのは違ふわ。

英作 そんなに違ふんなら、家飛び出さなけりやい、ぢやありませんか。

芳子 まあ、おほ、おほ。

ぬい子 おほ、おほ。

英作 とにかく、結婚した以上、容易に別れるものぢやありませんよ。夫婦と云ふものが、人生の中で一番大きい宿命ですからねえ。しかも同棲して五六年も経てば、感覺的には鼻についてゐても、どこか心の底に離れられない愛があるのです。一寸した感情の衝突で飛び出して、そこから間違か起つて、心の底では別れたくない夫婦が、別れる場合がいくらでもありますよ。たとへば、貴女の場台です。貴女は、電車の中で、深切な男に會はなかつたから、やうなもの、貴女の御主人の方です。いつもカフェなんかいらつしやいませんか。

芳子 そんな所へは、ちつとも参りません。

英作 ところが、貴女に家出されたむしやくしやで、きつとカフェへ行かれるでせう。それとも待合へでも行かれるかしら。

芳子 まあ穢らしい。妾の主人に限つて待合なんかへは、足踏みもした事ございませんわ。

英作 ぢや、カフェへ行かれるとするでせう。貴女の御主人は、失禮ですがまだお若いのでせう。

芳子 二十八でございます。

英作 お若いですね。商會へ出ていらつしやるとすれば、ハイカラな好男子でせう。

芳子 あら、冗談おつしやつちやいやだわ。でも……。あら恥しい！

英作 でも、いゝ男でせう。

芳子 恥しいわ。そんなことおつしやつちや、いやだわ。

英作 それ御覽なさい！ カフェなんか行くと女給の方で、わい／＼騒ぐでせう。貴女の御主人だつて、家へ歸つたつてつまらないから、自然腰を落着ける。女給の中では、一番背の高い感じのいゝ眼の下に小さいほくろがあるので、却つて色がくつきり白く見える娘が、貴女の御主人の傍へ來て坐るでせう。

ぬい子 まあ、貴女女給の描寫、いやに精しいのね。

英作 なあに、空想して話してゐるんだ。

ぬい子 何うですかね。そんな女給が何處かにゐるんでせう。

英作 (ぬい子に) まあ、お前は黙つておいで、とにかくその女給と二言三言話をすると、この女給

は案外話が分る。貴女の御主人は、文學がお好きですか。

芳子 ええ、大好きなのです。

英作 文學の話をしてみると、案外話が出来る。女給に似合はず、教養がある。感じが明るくて、ハキ／＼してゐる。新時代の女と云ふ氣がする。あくる日になつても、貴女が歸つて来ないから、同じカフェへ行く。だん／＼この女給が、好きになる。初めは、貴女の行方を探すつもりでゐたのが、この女給に氣を取られてゐるので、探す氣がなくなる。貴女は貴女で、茲の家にでもゐて、御主人が迎ひに来たら歸つてやらうと思つてゐたのが、こんな譯で迎ひが来ないものだから、えゝそんな亭主ならと云ふ氣になつて、いよ／＼別れる氣になる。御主人の方も、この女給と結婚する氣か何かになつて、貴女のことを思ひ切る。それ御覽なさい！ 最初は、別れる氣で飛び出したのではなくて、おしまひには別れなければならなくなるでせう。

ぬい子 (感動したる如く) さうね。

英作 お前にも分つたかい。

ぬい子 (反撥的に) 分らないわよ。

英作 何うです。芳子さん、何うしてでも、お歸りになれないのですか。

芳子 (ふさぎ込んでゐる) でも、妾決して歸つて来ないと云つて来たのですもの。

英作 でもそれは、喧嘩の意地張りでせう。意地は女の方から捨てなけりや。

芳子 でも、妾東京で新しい生活を……。

英作 貴女の結婚生活が不満で、新しい生活を望んでいらつしやるのでしたら、大間違ですよ。誰だつて、現在の生活が不満で、もつとどこかにいゝ生活があるやうな氣がするんですよ。田舎に居れば、東京の生活は、何だかいゝやうな氣がするのですよ。だが、それは夜目遠目の遠目ですよ。僕は、一昨日近所の戸山ヶ原へ行きました。そして、腰を下さうと思つて、足下の芝生を見ますと芝生が薄くて汚いのです。二三間向ふを見ると其處の芝生が、いかにもよく茂つてキレイなのです。で、其處まで歩いて行つて腰をおろさうとすると、其處も眞上から見ると、前と同じやうに薄くて汚いのです。所が、其處から前にゐた所を見ると、今度は前にゐた處の方が、よく茂つてゐて、キレイに見えるのです。人生もさうです。遠方から見ると、美しくキレイに見えるのです。だが、その生活の中に立つと薄くて汚いのです。薄くて汚くつても、其處へ満足して、腰を下すのが人生です。

(芳子、ぬい子、黙つてゐる)

英作 どうです、お歸りになる氣はありませんかね。

芳子 でも、妾ほんたうに決心して參つたのですもの。

英作 さうですかね。僕の云つてゐることに間違はないつもりですがね。

芳子 それはよく分つてゐます。

英作 さうですか。ぢや、まあよくお考へなさい。

芳子 あの、職業が見つかるまで四五日お邪魔になつてもよろしいでせうか。

英作 (あまり元氣なく) それはどうぞ。

ぬい子 御ゆつくり。

芳子 ぬい子さん、この近所に郵便局ありませんか。

ぬい子 え、ありますよ。でも、妾使に行つてあげませうか。

芳子 い、え、結構なの、自分で行きますわ。

ぬい子 あのね、家を出て左へずつと行つて、突き當つて、少し右へ行つて、直ぐ左へ折れて二町ばかり行くとありますわ。

芳子 左へ行つて、右へ行つて、左へですわ。

ぬい子 さう。

芳子 ぢや、妾一寸行つて來ますわ。

ぬい子 ぢや、妾その間に御飯の支度にかゝりますわ。

芳子 すみませんが、これ一寸何處かへおしまひ下さいませな。

(風呂敷包みをぬい子受取つて、押入の中へ入れる)

芳子 ぢや行つて來ますわ。

ぬい子 行つてらつしやい。

(芳子出てゆく。ぬい子と英作と顔を見合はせる)

ぬい子 困つたわねえ。

英作 うむ、困つた。あんな人に居られちや何も書けやしない。

ぬい子 それよりも寝る蒲團がないわ。

英作 こんな狭い家に、他人が居られちや、氣になつて、何も出來やしない。

ぬい子 ほんたうに、歸らないつもりなのかしら。

英作 どうだかね。先刻亭主ののろけを云つてみたぢやないか。俺が、好男子だらうと云つてやつたら、嬉しがつてゐたぢやないか。

ぬい子 あれぢや、未練があるんでせうね。

英作 あるだらうどころか、大有りだよ。別れる氣なんか、ちつともないんだよ。つまり、痴話喧嘩の延長だよ。

ぬい子 延長もい、けれど、こんな所へ來て泊られちや迷惑ですわ。

英作 迷惑だとも。俺の家なんか、お客様どころか家族の者も容れる設備だつてないんだからな。

ぬい子 どうしませう。

英作 だが、明日は歸るだらう。亭主に知らせてから、つまり自分の有難味を亭主に知らせてから、ゆつくり歸るつもりだらう。

ぬい子 だつて、ゆつくりなんか歸られちや此方が困るわ。

英作 今晚徹夜してども書かうと思つてゐたが、これぢや駄目だ。

ぬい子 貴君、もつと云はない。先刻の貴君の話、筋道がよく立つてゐるわ。貴君あんな話させると

上手ね。

英作 おだてるない。お前にも半分聞かせるのだ。

ぬい子 妾さう思つて聞いてゐたの。

英作 お前、やつぱり姉さんの處へ行くか。

ぬい子 それよりか、芳子さんの問題が大問題だわ。

英作 兄弟牆にせめげども、外侮を禦ぐか……あはゝゝゝ。

ぬい子 貴君何うかして下さいよ。

英作 だつて、追ひ出す譯にも行かないだらう。

ぬい子 ねえ、かうしない。先刻の貴君の話で、芳子さん随分里心がついてゐるでせう。

英作 ついて居るとも。俺は家へ電報を打ちに行つたのだらうと、睨んでゐるんだよ。

ぬい子 さうだわ。きつとさうだわ。妾もさう思つてたのよ。ねえ、貴君、妾、もつと芳子さんに里

心を付けようと思ふの。

英作 何うするんだい。

ぬい子 あのね。

英作 なんだい。

ぬい子 一寸恥しいこと。

英作 何うするんだい。

ぬい子 貴君と妾とがね、芳子さんの前で、うんと仲よくするの。

英作 そんな事出来ないよ。だつてお前、先刻俺と喧嘩したぢやないか。

ぬい子 だから、表面丈でいゝのよ。なるべく仲よくして、芳子さんを當てゝまげるのよ。さうすれば、芳子さんきつと堪らなくなつて歸るわ。

英作 名案だね。やつて見るかね。

ぬい子 え、やりませう。え、やりませうよ。妾、御飯をこさへるからね。芳子さんが歸つて來たら

東京中で一番仲のいゝ夫婦のやうに行動するのよ。

英作 少し面倒くさいがやらう。

ぬい子 やつてくれる、嬉しいわ。

(ぬい子、臺所へ行く。英作机の横でまた寝そべる所にて舞臺を一時くらくする。そして、時間が四

時間ばかり経つたことにする)

(舞臺再び明るくなると、四疊半の方に蒲團が敷かれてゐ、それに芳子が寝てゐる。六疊との間にぬい子

は閉められ、英作は、机に向つてゐる。ぬい子横で晝間の着物をほどいてゐる。英作とぬい子と顔

を見合して苦笑する)

英作 ぬい子。(非常に優しく)

ぬい子 はい。(非常に甘えたやうに)

英作 お前、この原稿を清書してくれないか。

ぬい子 えゝするわ。妾、少しでも貴君のお仕事の手傳ひが出来るのが一番嬉しいの。

(ぬい子、原稿紙を受取り、それが白紙であるので、危く吹き出さうとする)
英作 お前、そのペンぢや書き憎いことない。これをお使ひ。

(英作、硯箱の中から、錐を出してぬい子に渡さうとする。ぬい子、ふつと笑はうとするのを堪へて)
ぬい子 ありがたう。ぢや、この萬年筆借りるわ。妾が、使つちや癖がつかないこと。

英作 大丈夫だよ。

(芳子は寝られないと見えて、寝がへりを打つ)

ぬい子 ねえ、貴君。

英作 何だい。

ぬい子 今度暇になつたら、玉川へ連れて行つてくれない。

英作 あゝ行かう。

ぬい子 (芝居をしてゐるのを忘れて) ほんたう?

英作 何がさ。

ぬい子 ウソぢやない?

英作 ほんたうだとも。

(ぬい子、眼で實際にほんたうかどうかを確かめようとする)
英作 馬鹿!

(二人笑ふ。芳子寝られないと見えて、又寝がへりを打つ)

ぬい子 ねえ、貴君。

英作 何だい。

ぬい子 妾、銘仙がほしいの。

英作 銘仙位いつだつて、買つてやるよ。

ぬい子 この頃、銘仙が随分變つてるわねえ。銘仙で、お召のやうな飛白や、錦紗と同じ小紋なんかあ

るのよ。

英作 ぢや、今度松坂屋へでも行つて買はう。だが、買ふならいつそお召の方がいゝぢやないか。

ぬい子 (ウソだと云ふことを忘れて、本當にうれしがる) そらさうよ。そらお召の方が、いくらいゝ

か分らないわ。お召買つてくれる?

英作 よし、よし。

ぬい子 本當? うれしいわ。

英作 (あまり本當らしいことを話してはアトで困ると思つたらしく) お前、いつか翡翠の帶留がほし

いと云つてゐたね。

ぬい子 いや、そんな事云つてゐやしないわ。

英作 (苦笑して) さうだつたかな。何だか云つてゐたやうな氣がするがね。

ぬい子 さう、ぢや買つてくれる?

英作 今度陽文社から本が出るから、その印税で買つてやらうかと思つたのだ。

ぬい子 うれしいわ。買つて頂戴な。

(芳子、先刻から輾轉してゐたが、堪らなくなつたやうに、うつむけに起き直り、顔を蒲團から出す)

ぬい子 妾、これで子供があれば、もう足りないところはないんだけれどもねえ。

英作 何がさ。

ぬい子 だつて、貴君が愛して下さるでせう。(英作、あまり露骨なので、笑ひ出さんとしてやつと堪へる) 妾、常々さう思つてゐるの。貴君が愛して下さるし、これで子供でもあれば、東京中で一番幸福な妻だと思ふ位だわ。

(英作、少しくてれて、合槌が打てない。芳子堪らなくなつて、咳ばらひをする。)

芳子 えへんく。

ぬい子 (夫に云ふともなく、芳子に云ふともなく) 悪かつたわねえ、まだ起きていらつしつたの。

芳子 ええ。もう何時でせうかしら。

(芳子上半身を起す)

ぬい子 まだ、九時四十分ですわ。

芳子 新宿から、品川までは何時間かゝるでせう。

(ぬい子夫の腰のところをつゝきながら、笑ひをこらへて)

ぬい子 四十分もかゝらないでせう。

芳子 茲から新宿までは俵がありませんね。

ぬい子 ええありますとも。

芳子 妾、やつぱり歸ることにしますわ。

(英作とぬい子、一生懸命に笑ひをこらへる)

英作 さうですか。それは結構ですな。僕は大成です。

ぬい子 おほよよ、結構ですわ。

芳子 ええ歸りますわ。だつて、宅だつて妾を随分愛してゐてくれるんですもの。

(英作とぬい子、また笑ひの衝動をこらへる)

英作 そりや、僕も信じてゐますよ。かうしてゐれば、御主人が迎ひに來られるのに定まつてゐますけれども、早くお歸りになつた方がどれ丈いゝか分りませんよ。

ぬい子 (隔ての障子をあけて) ぢや妾、俵を呼んで來ますわ。

芳子 ええどうぞ。

(ぬい子、戸外へ行く。芳子、いそいで着物をきかへる)

英作 どうか、御主人によろしくお傳へ下さい。夫と云ふものは、妻がある程度以上善良である場合愛してゐないわけはありませんよ。同じ家に毎日一緒に居るのですもの、人間同志としてだつて、何うにもならない親しみが出來てゐるものですよ。一時、お互に感情を荒ませたつて、心底の愛はお互に消えるものですか。どうぞ、もう二度とこんなことのないやうにお暮し下さい。

芳子 どうもありがたう。半日でもかうしてゐますと、主人のいゝ所が分りますわ。
英作 さうでせうとも。さうでせうとも。

(ぬい子歸つて来る)

英作 傳あつた?

ぬい子 一緒に來ましたわ。

英作 ぢや、早くお乗りなさい。一晩でも家をあけると言ふことはいけない事ですわね。

芳子 ぢや、妾直ぐ失禮しますわ。

ぬい子 ぢや、どうぞ。

英作 今度は、御主人と御一緒に。

芳子 ぜひ、今度のお禮に伺ひますわ。主人もぜひ一度上ると申してゐましたの。

(芳子玄關へ出ようとして)

芳子 先刻おあづけした風呂敷包み。

ぬい子 さうく。忘れてゐましたわ。

(ぬい子取り出して渡す。芳子去る。引き出す傳の音。「左様なら」「御機嫌よう」の挨拶。ぬい子と英作と玄關から、歸つて来る。ぬい子腹をかゝへて笑ふ)

英作 何が可笑しいんだ。

ぬい子 だつて、あんまりうまく行つたのだから。

英作 馬鹿! 芳子さんが來なかつたら、お前が出て行つてゐるところぢやないか。

ぬい子 そらさうだわ。

英作 仲裁は時の氏神つて、芳子さんは氏神さまだよ。

ぬい子 だつて、此方だつて仲裁をして上げたのぢやないの。芳子さんから云へば、此方が氏神さまだわ。

英作 そらさうだね。だが見ろ、芳子さんだつて、夫の内を出ると、従妹の家へ來たつて直ぐ邪魔にされるぢやないか。

ぬい子 さうだわね。

英作 だが、芳子さんと云ふ人はいゝ人だよ、此方の狂言に乗つて、直ぐ歸るなんて。女は、素直でなけりやいけないねえ。

ぬい子 御主人と云ふ方も、きつと可愛がつてゐるんですよ。喧嘩して出たくせに、御主人ののろけを云つてゐるぢやないの。

英作 とにかく可笑しかつたわね。

ぬい子 可笑しかつたわねえ。

(突然、ガラリと云ふ音がして、二人びつくりする)

×× 傳屋です。あの、風呂敷包みが變つてゐるさうです。

(ぬい子、駭いて玄關へ行く)

ぬい子 大變だ。妾がこさへたのと間違つたのよ。

(慌て、押入をあけて、風呂敷包みを換へ俵屋に渡す。英作笑つてゐる。ぬい子英作の傍に来る)

ぬい子 まあ、驚いた。横濱まで持つて行かれちや、とんだ恥をかくところだつた。

英作 それ御覽！ 家を飛び出すなんて騒いでゐるから、そんな間違ひが起るんだ。風呂敷包の間違ひだからいゝやうなものゝ、もつと大きい取り返しのつかない間違ひだつたら、何うするんだい。

ぬい子 さうね、これからしないわ。

英作 どんなに喧嘩したつて、くつ付いてゐなきやウソだよ。

ぬい子 でも、貴君がちつとも愛してくれないんだもの。

英作 愛してやるよ。

ぬい子 さう、これから先刻のやうに仲よくしてくれる。

英作 まあ、ある程度まではねえ。

ぬい子 貴君、先刻お召買つてくれると云つたの本當？

英作 馬鹿、ありや芝居ぢやないか。

ぬい子 いやよ、妾そんなつもりぢやないのよ。

英作 ぢや、銘仙を買つてやらう。

ぬい子 だつて、お召の方がやつぱりいゝと云つたぢやない？

英作 だつて、お前にだつてお召と同じやうな柄があると云つたぢやないか。

ぬい子 いやな人、つまらないことを覚えてゐるのねえ。ぢや、銘仙でもいいわ。

英作 何だか、氣がせいゝくした。原稿が書けさうだ。

ぬい子 かいて頂戴な。

英作 うむ。

(英作六疊の方へ行き、机の前で坐る。ぬい子自分のこさへた風呂敷包みをときかける所にて幕)

戀愛病患者

人物

佐々木貞一

ある専門學校教授、年五十五六、古い文學士

さだ子

その妻、四十五六、年よりは若く見える

哲夫

彼等の長男、文科大學生、二十一二

敏子

彼等の長女、すでに他家へ嫁いでゐる、二十三四

松村謙一

敏子の夫、醫科大學の助手をしてゐる若い學士

久美子

彼等の次女、十八、美しい少女

その他重要でない人々

時

今日

所

東京の山手

情景

佐々木貞一の家、二階建、七間か八間がある。階下には、八疊と、六疊がつゞいてゐる。舞臺は八疊の間。客座敷に使ふとみえてよく片附いてゐる。床の間には、相當立派なものであるらし

い南畫の山水が懸けてある。青磁の花瓶には白百合が投げ入れてあるので、初夏であることがわかる。床の間のわきは違ひ棚になつてゐる。その下に、書棚が置いてあり、その上に、和綴の本が體裁よく置かれてゐる。主人が、國文學か、歴史かの教授であることがこれでわかる。縁側近くさだ子と、長男の哲夫と、長女の敏子とが、首を鳩めて、坐つてゐる。哲夫は、手に電報を、持つてゐる。

さだ子 まあ、警察にゐるんだつて。何といふことだらう。

哲夫 いやになつちまふなあ。たしかに警察ですよ。ケウサツとなつてゐますがこのウはきつとイの間違ひですよ。

さだ子 さうだね。どれ、一寸、貸して御らん。(電報を哲夫の手から受取る) さうだね、たしかに警察だね。他に心あたりはないもの。

敏子 まあ、久美ちゃんも、とんだことをしたものだね。

さだ子 ほんたうだよ。まさか、あんなおとなしい子が、こんなことをするとは思はなかつたよ。いやだく。

敏子 ほんたうに、いやになつてしまひますわね。新聞にでも書かれたら、どうなるのでせう。

哲夫 まさか、こんな小事件を書きはしないと思ふけれど、田舎の通信員なんて、どんな事件でも通信してゐるんだからなあ。

さだ子 お父さんの名前でも出たら、とんだことになりますね。

哲夫 出たつて、仕方ありませんよ。久美子の家出は、お父さんに責任があるんだから。

さだ子 さうは言はれませんか。

哲夫 いゝえ、さうですよ。たしかにさうですよ。お父さんが、つまらなく、子供を壓迫するからですよ。

敏子 さう。何かお父さんが久美子に仰つたの。

哲夫 さうですよ。お父さんが、つまらない壓迫を加へるからですよ。

敏子 どうしたの、一體。

哲夫 久美子が、今度一緒に家出をした、山崎といふ學生と、絶対に、交際をしたらいけないといふんですよ。

敏子 ぢやあ、久美子と山崎といふ人は、よつほど前から、知り合ひなの。

哲夫 もう、半年にもなるでせう。とにかく家出する前に、戀愛はあつたけれども、それやあ、綺麗なつきあひだつたんですよ。純な交際だつたんですよ。それは、僕はあくまでも、信じてやりたいのです。それをさ、お父さんが、二人がつき合つてゐることを、許すべからざる、罪惡のやうに考へたんですよ。二人が何か、卑しい恥しいことでも、やつてゐるやうに、考へてゐるんですよ。頭が舊くつて、お話にもなりやあしない。

敏子 それで、お父さんが、何か言つたの。

哲夫 久美子と、山崎君とが、氷川さまの境内を一緒に歩いてゐるところを、お父さんに見附かつた

のですよ。さうすると、お父さんは、かつとして仕舞つて、その場から、久美子の肩をつかんで、家へ引張つて歸つたんですよ。まるで、やり方が、野蠻人なんですよ。

敏子 そりやあ、まあ、お父さんも随分ひどいわね。

哲夫 ひどいの、ひどくないのつて、てんで人間に對して、扱ひ方をしらないんですよ。たとひ、自分の子だからといつて、人間としての尊敬を忘れちゃあ、駄目ですよ。

敏子 それは、さうだわね。

哲夫 久美子だつて、十八ですよ。文學や、思想の本は、可なり讀んでゐるでせう。そして、自分のやつてゐることを、さう、不當な、不正なことだとは、思つてゐないでせう。それなのに、お父さんに、引ずつて歸られて、以後山崎には、絶対に會つては、いけないと、言はれたんだもの。久美子が、かつとしたのも、もつともですよ。

敏子 ほんたうにね。いけないいわね。お父さんも、頑固すぎるわね。

哲夫 頑固だけではないですね。無茶ですよ。亂暴ですよ。いくら久美子の身體を、束縛したつて、久美子の思想までは、どうすることも、出来ませんよ。久美子が反動的に家を飛出したのも、もつともですよ。吾々若い時代の者の心持に、少しの理解もない、また、戀愛といふものに對して、ちつとも同情のないお父さんのやうな人が、世の中に却つて害悪を、流すのですよ。

敏子 まあ、さうでもないんだけど、お父様が頑固すぎるのが悪いんだわね。

哲夫 そんな態度だけの問題では、ないんですよ。根本問題ですよ。てんで、戀愛に理解がないのだ

からなあ。戀愛といふことを、一つの醜行だと思つてゐるんだから、かなはないや。

敏子 お父様は、何といつても、頭が舊いんだわね。

哲夫 お父さんさへ、あんな亂暴なことをやらなければ、二人は、いつまでも、清く、つきあつてゐたのですよ。それを、お父さんが、あんな、亂暴をやるから、二人とも、反動的に、家出なんかやつてしまつたんですよ。

敏子 でも、久美ちゃんも、あんまり、考へなしだわね。

哲夫 考へなしぢやあ、ありませんよ。考へがありすぎるから、反動的に出るのですよ。

敏子 それも、さうだわね。

哲夫 久美子が、もし、死にでもしたら、僕は、お父さんと、徹底的に、喧嘩をするつもりでゐたんだ。

さだ子 でも、まあ、どうして、警察へなんか行つてゐたのだらうね。

哲夫 きつと、宿屋かなんかに、一緒に、泊つてゐたんでせう。

さだ子 まあ、一緒に泊つてゐたんですよ。

哲夫 (苦笑して) 一緒に泊らないで、どうするんです。

さだ子 だつて、まあ、若い男と一緒に、：：：そんな、大それたことを。

哲夫 だつて仕方がありませんよ。命がけでやつてゐることですもの。

敏子 でも、まあ、いゝわ。この上、心中でもしてくれた日には、目もあてられないんだけど、無事

に、目附かつて来たのだから、歸つてきても、あまり、ガミ／＼言はない方がいゝわ。何なら、私
の家へ久美ちゃんを、當分の間預けておかない？

さだ子 さうね。お父さんが、何と仰しやるか。

敏子 山崎さんて、何處の學生。

哲夫 お父様の學校の生徒ですよ。しかもお父様の擔任だ。

敏子 まあ、さう。田舎の人、東京の人？

哲夫 尼ヶ崎か、どこか、關西の人ですよ。

敏子 どんな人。いゝ人？

哲夫 どんなか知りませんよ。でも、見たところ普通の人ですよ。

敏子 お金持の息子？

哲夫 そんなことは、しらないなあ。

敏子 お父様は、何て仰しやつてゐるの。

哲夫 何をです。

敏子 久美子の、家出のことをさ。

哲夫 何とも言やあしない。久美子が、ゐなくなつてからは、二階へあがつたきりで、御飯の時やつ
とおりにくるだけさ。

敏子 久美子を、家へ入れないと、言やあしない？

哲夫 どうだか。

さだ子 歸つてくれば、歸つて来たで、また一苦勞だよ。簡単にをさまるまいからね。

敏子 さうですわね。

哲夫 お父さんが、ぐ／＼言へば、今度は僕が、承知しないんだ。

さだ子 お前が、さう喧嘩腰になつたら、困りますよ。

哲夫 でも、お父さんが、悪いんだもの。僕は今まで、だまつてゐたが、今度だけは黙つてゐないつ
もりだ。

(三人、暫く、無言。母また電報を、取上げてみる)

さだ子 あの子は、無邪氣な、ねんねえのやうな子供だったのに、とんでもないことを、してくれた
ね。

哲夫 みんな、お父さんが、悪いんですよ。

さだ子 お前、そんな大きな聲で言ふと、お父さんに、聞えますよ。

哲夫 聞えたつて、いゝですよ。

敏子 山崎さんの方も、親類の方が来てゐるんですつて？

さだ子 え、さう。兄さんか誰か来てゐるんですつて。

敏子 ぢやあ、家の人と、鎌倉で、落合つてゐますね。

さだ子 さうかも、しれないよ。

敏子 かうなつた以上、山崎さんの方と、話して、お嫁に、貰つてもらふんですね。

さだ子 妾も、さうするより外、ないと思ふんだよ。妾も、さう思つてゐるんだけど、お父様が、大した、お腹立ちなので、さう安々と許して下さるか、どうか。

敏子 その位のこと、お父様にも、わからないことはないと思ふわ。

哲夫 どうだかなあ、分らずやの頑固親父だから。

敏子 その電報、何時に打つたの。

哲夫 (電報を、母の手から取つて) 發信、午後二時四十分か。

敏子 ぢやあ、二時間かゝつてゐるんだね。

哲夫 汽車で、來ると同じだ。

敏子 ぢやあ、電報を打つてから立つたとしても、もうこちらへ着く時分ですわ。

哲夫 さうだなあ。もう、つく時分だなあ。

敏子 久美ちゃんを、すぐ家へ連れてくるかしら。

哲夫 連れて、くるでせう。

敏子 私の家へ、一度連れて、行きやあしないかしら。

哲夫 だつて、姉さんが、こちらへ來てゐるといふことを、義兄さんは知つてゐるでせう。

敏子 それやあ、知つてる筈よ。

哲夫 ぢやあ、こちらへ、連れてきますよ、きつと。

さだ子 ほんとに、謙さんには、すまないわね。こんな、迷惑なこと許りたのんで。

敏子 いゝんですよ。いつも、大學から歸ると、ゴロ／＼してゐるんですもの。それに、家の人が仲

へ入れば、お父さんにだつて少しは、ちがふでせう。

哲夫 ちがやあしないよ。とても、頑固だからなあ。

敏子 家の人も、結婚させるといふ意見なのよ、相手の身分を調べて、相手の家がしつかりした家な

ら。

哲夫 山崎といふ男は、少し、おつちよこちよいらしいけれども、家は相當らしい。

(自動車の音が、遙かに聞える)

敏子 (聞き耳をたて) 家の人かも、しれないわ。

哲夫 どうして。

敏子 家の人、よくタクシーにのるのよ。

(自動車の音、だん／＼近くなる。戶外に止つたやうな、氣勢がする。敏子そは／＼と、立上る)

敏子 きつと、家の人だわ。(玄關へ行く)

さだ子 (不安さうに) どうなることだか。

哲夫 どうもなる筈は、ないですよ。僕は、あくまでも、久美子の立場を、擁護してやるのです。

さだ子 成るべく、お父様、お氣にさはらない様に、圓く、をさめたいものだね。

哲夫 そんなことは、今時出來ませんよ。

(敏子、慌たゞしく入つて来る)

敏子 やつぱり、家の人よ。久美ちゃん、家へ入らないくといつて、拗ねてるの。
哲夫 なにも、そんなに、氣兼ねすることはない。僕が行つて、引張りこんでやらあ。

(哲夫、座を立つて、玄關の方へ行く。自動車のエンジンの音、格子の開く音、やがて、哲夫の聲がきこえる)

哲夫 (姿は見えないで) 何もビク／＼することははない、お入りよ。お入りよ。自分の家ぢやあないか。お入りよ。何も、お父さんなんか恐がる必要はないよ。お入りよ、……何だ、恥しい？ぢやあとにかく、話のつくまで、お前の部屋へ行つてお入るよ。いゝか、安心して、待つてお入るよ。

(……間……哲夫と敏子と、敏子の夫の松村謙一と一緒に、出て来る。松村は背廣を着てゐる)

謙一 (坐つて、挨拶しながら) お母さん。御安心ない。久美ちゃんを、無事に、連れて歸りましたよ。

さだ子 (さすがに、嬉しさうな、表情を湛へながら) どうも、とんだ御厄介をかけて相すみませぬ。ほんたうに、ねんねえの癖に、とんでもないことをいたしました。

謙一 いや、なあに、もう大丈夫です。御心配に、ならなくとも大丈夫です。先方の兄といふのも、大變よくことの分つた人ですから。

さだ子 一體、どうして、警察の厄介なんかに、なつたのでございませう。

謙一 長谷の宿屋に、泊つたのですが、何となく、舉動不審だったので、宿屋の方で警察へしらした

らしいのです。

さだ子 (暗い顔になつて) まあ。一緒に泊つたのですかね。

謙一 (返答に窮しながら) さうらしいです。

さだ子 (暗然として) 取かへしのつかないことを、致しましたものです。

哲夫 仕方ありませんや、お母さん。

謙一 さうですとも。もう出来たことは、出来たことです。それで、先方の兄さんといふ人も、よく話したのですがね。向ふでは、久美子さんを、嫁にもらつても、いゝといふのです。

敏子 さう？それなら、いゝわ。
哲夫 責任を解するものとしては、さうならなければ、ならない筈だ。

さだ子 さうね。さう願へれば、結構だけど。

謙一 それで、向ふの兄さんの言ふのには、良家のお嬢さん連れ出したのは、全然私の弟の責任です。ですから、お詫びのしるしとして、結婚のお約束だけは、今すぐ取りきめて、歸りたいと、いふので

す。

敏子 さう？ぢやあ、よく、話が分つてゐるわね。

哲夫 向ふが、さう言つて、くれるのなら、こちら満足だ。

謙一 さうですとも。相手がよかつたのが、こちらの仕合せですよ。かうして責任を負つて、くれれば、問題はありませんよ。

さだ子 さうですわね。妾も、やつと、これで安心しましたよ。でも父が、どう申しますか。
謙一 僕が、お父さんに、お目にかゝつて、お話ししたいと思ひますから、御都合を、伺つてみて、下
さいませんか。

さだ子 はい、畏りました。ぢやあ、一寸、都合を、きいて参りませう。(さだ子、やゝ不安らし
く、座敷を、出て行く)

謙一 お父さんも、これには、御賛成なさるだらう。

哲夫 さうですとも。父が、どんなに頑固だつて、これ以外には、解決は、ないんだから。

敏子 ほんとに、相手が、よかつたのですわね。

謙一 やつぱり、久美子さんが、それだけは、心得てゐたんだよ。つまらない者に、引かゝらなかつ

たゞけ久美さんが、利口なんだよ。

敏子 久美ちゃんを、一人で置いてゝも、大丈夫かしら。

謙一 大丈夫だよ。

(さだ子入つて来る)

さだ子 (謙一に) すぐ、降りてまゐるさうでございます。

謙一 あゝ、さうですか。

哲夫 お父さんはどんな顔してた?

さだ子 どんな顔だか、妾、分りませんよ。

(四人、暫く不安な沈黙に、閉される。敏子、この沈黙からのがれようとして)

敏子 妾は久美ちゃんの處へ、行つてゐよう。

(暫く、不安な沈黙。やがて二階の階段を降りる音が、かすかに聞える。開けられてゐる襖の間から、
彼等の父が出て来る。哲夫が罵倒してゐる程頑固親父に見えない。むしろ柔和に見える。半白の口
髯を生し、色の白いやゝ感情的な、娘達の美貌が成程と、うなづける程、整つた顔の老人。娘の家
出等に就いて何も考へてゐないやうな、悠々たる態度を見せてゐる)

貞一 (謙一に) よう、暫く。

謙一 や、暫く。いつも御無沙汰許り致しまして。

貞一 いや、そりやお互様だ。いつもお達者かな。

謙一 はい、お蔭で。

貞一 學校の方は毎日行つてる?

謙一 はい、毎日行つてゐます。

貞一 博士論文の方の仕事は、少しは進行しましたか。

謙一 はい、もう半年もやればどうか、目鼻がつきさうです。

貞一 今度貴方の方の部長は、變つたやうですわね。

謙一 はい、藤田博士になりました。

貞一 藤田さんといふ人は、やはり青山さんのお弟子ですか。

謙一 (相手が肝心な問題に觸れないで、少しいらくしながら) 弟子といつて、單に教室で講義を聴いただけの關係ですが。

貞一 あゝさうですか、さうですか。大學の移轉問題はどうになりました。

謙一 (益々いらくして) え、そんな問題には餘り興味がないもんですから。

貞一 成程。純粹な學者にとつては、どうでもいゝ問題ですからね。

謙一 お父様、實は久美子さんのことについて一寸お話ししたいのですが。

貞一 うん。そんなことを言つてゐたね。

(哲夫と、さだ子の方をジロリと見ながら)

貞一 さう、その話なら、(哲夫とさだ子の方をみて) お前達は一寸あつちへ行つておみて。

さだ子 はい。(立つて去る)

(哲夫、動かうとしない)

貞一 哲夫、お前もあちらへ行つてゐたらどうだ。

哲夫 久美子の話なら僕もこゝにゐたいんです、あいつの運命を決める話なんですから。

貞一 (少しむつとする) お前はまだ學生だぜ。

哲夫 學生だつて、一人前の人間です。久美子のたつた一人しかない兄ですよ。

謙一 哲夫さん、貴方がさういふ態度に出ると困りますよ。お父さんがあゝ仰有るんだから、あつちへ行つて、ゐられる方が久美子さんの爲ですよ

哲夫 貴方がさう仰有るんなら行つてゐませう。

(哲夫去る)

謙一 外でもないんですが、今日鎌倉へ久美子さんを迎へに行つたんです。

貞一 それは御苦勞、どうもとんだ奴で。

謙一 それで、とにかく家へお連れして歸つたのですが。

貞一 さうですか、どうもたゞでは鬨を跨がせる奴ではないんですが。

謙一 さぞ御立腹でございませうが、何分年も若いし、あまり考へもなくやられたことですから、これは一つ、寛大にお考へになつて頂きたいのです。

貞一 (苦笑して) さう寛大に考へられることではないんですが。

謙一 そこをどうか一つ、すぎ去つたことは過ぎ去つたこととして、許して頂きたいのです。それに就いて先方の兄といふ男にも會つたのですが、お嬢さんをお連れ出して重々申譯がないと、謝つてゐるのです。

貞一 うん。お嬢様

謙一 それで先方の兄の申すには、他にお詫びの申し様もないから、かうなつたのを御縁に、お嬢様を弟の嫁として頂きたいといふのですが。

貞一 うん。お嬢様にささげさ

謙一 何でもその山崎といふ人の家は、尼ヶ崎で相當な財産家ださうです。それでお嬢さんにささげさ

貞一 うん。
き不自由をさせるやうなことはないから、是非頂きたいといふのですが。

謙一 いかゞでせう。若い二人の罪をお許しになつて久美子さんをおやりになつたらどうです。この問題の解決としてはこれ程いゝことはないと思ふのです。

貞一 うん。

謙一 いかゞでせう。許して下さるでせうか。

貞一 何をですか、二人の罪をですか？

謙一 さうです、二人の罪を許して頂きたいのですが、それと同時に結婚のお許しも頂きたいのです。

貞一 二人の罪を許すことは、許さないといつたところで、どうにもなることではないんだから、それは許してもいゝと思ひます。

謙一 それと同時に、結婚のお許しも願ひたいもんですなあ。

貞一 (敢然と) それは、問題です。

謙一 (意外な顔をして) それはどうしてです。

貞一 いや、それはたやすくは決められません。

謙一 それは困りましたなあ。實は先方の兄が約束だけでも決めて歸りたいと言つてゐるのです。それでお父様の大體の意向だけでもお伺ひしたいのです。

貞一 いや、それは一寸申上げられません。
謙一 これは重大な問題ですが、お考へになる必要のある問題だと思ひまます。大體にお許しにな

るかならないかは、すぐ頭に浮んで來るものだと思ひますが。

貞一 いや、それは浮んで來ないこともありませぬ。

謙一 ぢやあ、お許しになりますか。

貞一 いゝえ、お斷りしたいと思ひます。

謙一 (一寸驚いて) えゝ、お斷りになるんですつて。

貞一 さうです。

謙一 お斷りになるといふことは、僕には考へられませんね。

貞一 何故です。

謙一 (少し興奮して) 久美子さんの將來のことも少し考へてあげたらどうです。

貞一 それは貴方に言はれなくても、俺も考へてゐる。

謙一 お考へになつたらこの結婚を、お許しになるのが當然ぢやありませんか。

貞一 それは貴方の考へ方だ。

謙一 (少しむつとして) さうでせうか、私だけの考へ方でせうか。(二人暫く無言)

貞一 お父さんも御存じだらうと思ひますが：：こんなことは言ひたくないんですが、久美子さんは鎌倉で、山崎といふ學生と同じ部屋に寝てゐたのです。(謙一、貞一の顔を見る、貞一の表情は動か

ない)……一緒に部屋に寝泊りしてゐた以上、久美子さんは當然處女でなくなつたと考へねばなりませんか。

貞一 (暗く黙つてゐるが) そんなことは俺も察してゐる。

謙一 處女でないとするは將來結婚せられるに就いても、非常な不利な立場に陥るほかはないと思ふのですが、夫れよりも先方の申出を容れて、結婚をお許しになつた方が、久美子さんに疵がつかず

貞一 それは貴方の考へ方かもしれん。しかし俺は不賛成だ。

謙一 それぢや、みすく久美子さんを不幸に陥れるやうなものですな。

貞一 (暗く考へて) いや、俺はさうは思はない。

謙一 さうですかなあ。僕にはお父様の考へ方が分りませんなあ。僕は出来るだけお宅のお名前に疵がつかないやう、當人達に疵がつかないやう圓滿にをさめようと思つて、先方の兄ともよく話してみたのですが、お父さんのお考へがさうだとすると、僕は手を引くより外ありませんなあ。それぢやあ、あんまり久美子さんが可哀さうですなあ。

貞一 (だまつてゐる)……。

謙一 ぢや仕方ありません。これから行つて先方の兄の返事をしておきませう。だがお父さん、お母さんや哲夫さんに御相談なさらなくてもいゝのですか。

貞一 いや娘のことは、俺の一存でたくさんだ。

謙一 (憤然として立上る)ぢやあ、お父さん失禮、今から行つて來ます。

(謙一、去らうとする。哲夫、奥より慌しく飛込んで來る、義兄を引止める)

哲夫 義兄さん、待つて下さい。こんな重大な問題が、お父さんだけで決められぢやあ、たまらない。待つて下さい、義兄さん。

(謙一、哲夫に引止められて坐る)

哲夫 (父に向つて昂然といざよりながら) お父さん、僕は今のお話は外でできてゐたのです。山崎との縁談をお断りになるなんて、そんな無茶なお話はないぢやありませんか。

貞一 何を云ふ。お前はだまつておゐるで。妹の將來を決める大問題です。

哲夫 いゝえ、だまつてはゐません。こんなことは大問題ですよ。

貞一 (やゝ興奮しながら) 大問題だから俺も断つたんだ。

哲夫 大問題だから断る? そんな大問題をお父さんお獨りで断つていゝんですか。

貞一 いゝとも、俺は父だよ。

哲夫 父にはそんな権利があるんですか。

貞一 あるとも。

哲夫 あるとなひとは別問題にしても、どういふ理由でお断りになるんです。

貞一 理由? 山崎が氣に入らないから。

哲夫 山崎が氣に入らないといふんですか。でも、當人の久美子が氣に入つてれば、それでいゝぢ

やありませんか。

貞一 當人が氣に入つてる？ そんなことは問題でない。當人が氣に入つてたつて山崎はオッチョコチヨイだよ。輕薄才子だよ。あんな者に、久美子を添はせたくない。

(父子の言ひ争ひがだん／＼盛んになるので、さだ子、敏子座敷の闕ぎはに、しのびやかに寄つて聞いてゐる)

哲夫 山崎君がオッチョコチヨイですつて、そんなことがお父さんにお分りになつてゐるんですか。

貞一 分つてゐる。俺は教室であいつを教へてゐる。

哲夫 ぢやあお父さんの御意見にしたがつて、オッチョコチヨイの輕薄才子だと假定してもいゝです。しかし久美子が將來の夫として思つてゐる以上、お父さんがはたから口を出すことがあるもんだすか。

貞一 馬鹿。何をいふ。そんな馬鹿なことがあるもんか。久美子が小さい時に青い未熟な果物を食つてれば、親がはたから取上げるのは親の權利だ。いや權利計りぢやあない義務だ。義務だけぢやあない慈悲だ。

哲夫 でも、久美子は七つ八つの子供ではありませんよ。

貞一 なに、俺の目からみれば同じことだ。七つや八つで果物が熟れてゐるか熟れてゐないか、分らないやうに、十九や二十で男性の熟、未熟は分らないんだ。山崎は俺の目からみれば青い柿のやうなもんだ。

哲夫 當人が好きなら、青い柿だつて何だつて、いゝぢやありませんか。

貞一 當人が青い柿だと分らないで食べてゐるんだ。それをはたで黙つてみてゐる譯にはゆかない。謙一 でもお父さん。もう久美子さんはその山崎といふ男と、肉體的に夫婦になつてゐるんですよ。

もう取返しつかないことをしてをられるのです。それをお考へになれば、たとへお父様に多少の御不満があつてもお忍びになるのが、あたりまへだと思ひますね。

貞一 俺はさうは思はないな。久美子が一度誤つたことをしたからといつて、親が許してそれを生涯續けさせるといふ法はない。あ奴が毒になる果物を一口食つたからといつて、それをすつかり食べさせなければならぬといふ法はない。

哲夫 (激昂して) お父さんの言つてゐられることは理窟です。つまらないへこ理窟だ。お父さんは戀愛といふことをどう考へられてゐるのです。

貞一 ふん、戀愛か。戀愛がどうしたといふんだ。哲夫 戀愛が神聖なものだといふことが、お分りにならないんですか。くだらない理窟など仰有る前に久美子の戀愛を認めてやることは出来ないんですか。たとひ山崎がオッチョコチヨイにしろ、輕薄者にしろ、久美子との間に純な戀愛があれば、二人の關係は立派だと思ふんです。

貞一 俺は戀愛などを立派だと思はないなあ。哲夫 (激昂して) さうでせう。お父さんには戀愛は一つの醜行としか見えないんでせう。

貞一 醜行？

哲夫 醜は醜悪の醜です。

貞一 ふん。俺は醜行とも思はないなあ。戀愛は一つの病氣だよ。

哲夫 なに、病氣ですつて？

貞一 青年男女のかゝり易い病氣だよ。はゝゝゝ。

哲夫 病氣だつたら、どうしたといふんです。

貞一 この病氣にかゝると、若い青年男女は夢我夢中になつてしまふんだ。何も分らなくなつてしまふんだ。この病氣にかゝると男は自分がしてはならないことをするんだ。女は男の本當のよいところが目につかないで、つまらないところに感心してしまふのだ。世の中の戀愛をしてゐる男女をみるがいゝ。本當に人格的な美しさを愛し合つてゐるものが幾人あると思ふ。殊に戀愛で理性を無くしてしまふのは女だ。男が一寸様子がいゝとか、一寸男振りがいゝとか、一寸ハーモニカを吹くとか、一寸獨唱をやるとか、そんな本質的な人格とは全く別な輕薄なところで戀愛するのだ。一生を伴にしなければならぬ相手を、一時の迷ひの爲に、一時の熱に浮かされて選擇するなんて、以ての外のことだ。久美子は今熱病にかゝつてゐるのだ。そんな熱病患者の好みによつて生涯の夫を決めるなんて、俺は不賛成だ。そんな夫を持たせて俺はあいつの一生を臺無しにしたくはない。そんなことをさせるには俺は久美子を愛しすぎてゐる。

(哲夫もやゝ、父つ説に壓迫されて黙つてゐる。父の言葉の最中に、久美子は母と姉との間に來て泣きながら 父の言ふことをきいてゐる)

謙一 お父様のお説の當否は私には分りませんが。

哲夫 いや、僕は反對だ。戀愛といふものはお父さんの言ふやうな、そんな卑しいものではない。人生の原動力です。熱病だとか何とかみんなお父さんのへこ理窟だ。

貞一 さういふ議論もあるだらう。だが久美子でもお前でも俺に養はれてゐる中は、俺の言ふ通りになるより外ないんだ。經濟的獨立がない處には戀愛の自由もないんだよ。

(哲夫、激昂して何か言はうとして言へない)

さだ子 (部屋へ入つて來て夫の方へいざり寄る) でも貴君、久美子は疵物ですよ。他にお嫁には行

けない……………

貞一 そんな疵跡なんか病氣の故なんだ。今に病氣が治れば何でもなくなるよ。何も一生の傷でも何でもありません。一時の誤ちから受けた傷だ。本當に久美子を愛してくれる男だつたら、わけなく許してくれるだらう。謙一さん、貴方には御苦勞だが行つて斷つて下さい。

哲夫 お父さん、そんな馬鹿な。

さだ子 貴君、そんな。

貞一 いや、斷つて下さい。

(國の向ふにゐた久美子、わつと泣き出す)

貞一 (初めて久美子の存在に氣がつき) 久美子か。泣きたければ、泣くがいゝ。泣いてゐる中にお前の病氣も醒めるんだ。この熱病に限つて、熱の引かないことはないんだ。今お前はお父さんを恨

むだらう。だがお父さんのお前の病氣に對する處置は誤つてゐないつもりだ。お前がこの先ほんたうにいい結婚をした時には、お父さんの處置を感謝してくれるに違ひないのだ。

久美子 いゝえ、妾結婚なんて決してしませんわ。(わつと泣く)

貞一 お前の熱はまだ可なり重いなあ。もつと泣くといゝ、もつと泣くといゝ。だがお前はその位の熱で身體まで毫無しにするやうな女ではないだらう。お父さんはそれを信じてゐるよ。

(貞一、この白を言ひながら、二階へ上つてしまふ。……久美子の泣き聲更らに高くなつて後、幕)

妻

人物

川 瀬

三十二三の男

女

丸鬚に結つてゐるが、藝妓であることが直ぐ判る女、二十一

旅館の女中

所

東京に近き海岸

時

ある年の冬

情景

旅館の一室。可なり立派。卓上電話などある。人氣なくやゝ荒寥たる感じ。雨戸なども閉められてゐる。幕開くと男と女、女中に案内せられて登場。

男

なるほど、お客はありませんね。

女

今が、一番ひどうございますよ。戸なんか、かうして幾日も開けないんでございますよ。

(女中急いで雨戸を二三枚開ける。夕暮の海が見える)

男

でも、夏場ウンと儲けてあるからいゝでせう。

女中

さうでも、ございませぬわ。夏場と申しても、ホンの丸二月でございますからね。(座蒲團を

押入れより出し) どうぞお敷き下さいませ。

女 (立つたまゝで) ねえ、ちよいと。妾暮れない中に鈴龍さんの所へ行つて来るわ。

男 うむ、早く行つて、早く歸つておいで。

女 (女中に) ちよいと、此の家を出て右へ行くと、山部と云ふ煙草屋さんがありますわねえ。

女中 えゝ、ございます。

女 あすこまで、茲から二丁もありますかしら。

女中 いゝえ、そんなにございませぬ。橋をお渡りになると、直ぐでございませぬ。

女 (取つたシヨールをまた首にまとひながら) ぢや、わたし一寸行つて来るわ。

男 直ぐ歸つておいでよ。向ふでお茶なんか飲んぢやいけないよ。

女 えゝ、でも妾肺病なんか恐くないわ。

男 恐くなくつたつて、傳染つちや困るぢやないか。

女 傳染つたら死んでしまふわ。なんて…ぢや妾行つて来るわ。

(女、女中と連れ立つて去る。男縁側へ出て、しばらく海を眺めてゐる。女中、火を持って来て火鉢

に入れる。直ぐ去つてお茶を持つて来る)

女中 どうぞお茶を。

男 富士が、かすかに見えてゐるね。

女中 冬は、毎日のやうに見えてゐます。

男 冬は、全く淋しい土地だねえ。

女中 これでも、春先になると、お客様がボツ／＼お見えになります。

男 落着くことは落着くがね。

女中 でも、あまり落着き過ぎますわねえ。

男 本當だ。心中でもするのには、いゝ土地だな。

女中 まあ、御冗談を。でも去年もございましたのよ、丁度今頃。

男 此の家でかい!

女中 いゝえ、此の向ふの海岸で。

男 身を投げたのだねえ。

女中 えゝ抱合心中でした。

男 いゝ女だつたかい!

女中 まだ二十前の女學生らしい女でした。

男 男は?

女中 男は、三十二三の立派な方でしたよ。何だか奥さんがお在りになるやうな話でしたよ。

男 (一寸いやな顔をしながら) 叶はぬ戀と云ふ奴だねえ。

女中 奥さんが、お可哀さうですわねえ。

男 うむ、まあさう云つたわけだね。

女 でも、お邦さんは感心だわねえ。あんな浮氣者が、よく俊ちゃんの看病をしてゐるわねえ。

男 やつぱり、人情があるんだね。

女 お邦さんにも病氣が、きつと傳染つてゐるわねえ。

男 傳染つてゐるだらう。接吻なんかするだらうからね。

女 そりやするでせう。でも、俊ちゃんの肺病が、傳染つて死ねば、心中ですわねえ。

男 先づ心中と同じだね。

女 肺病心中ですわねえ。

男 お前はどうか。俺が、肺病になつたら看病してくれるかね。

女 え、しますとも。看病だつて、何だつてするわ。でも、貴君は肺病になりさうはないわねえ。

男 肺病になるならないが、問題ぢやないんだ。俺と一緒に死ねるかいと云ふんだい。

女 え、死にますとも。何時だつて、死ぬわ。

男 (やゝ眞目面に) 本當かい。

女 嘘なんか、云はないわ。

男 ぢや、今一緒に死なうと云つたら、死ぬか。

女 え、死ぬわ。いつだつて死ぬわ。

男 冗談ぢやないんだぜ。

女 え、冗談ぢやないわ。

男 ぢや、いよくとなつて駭くな。

女 (少し不安になり) まあ、どうするの。

男 俺は、ピストルを持つて來てゐるんだよ。

女 まあ。ほんたう。

(男ピストルを取り出して卓上に置く)

女 まあピストル! あなた何時か持つてゐると云つたわねえ。(恐々取り上げて見る) 彈丸がこめ
てあるの。

男 あるとも、五發とも這入つてゐる。

女 まあ、恐いわねえ。死んでもいいわ。でも、死ななくつてもいいぢやないの。

男 お前の心が、確でないから死にたいんだ。

女 まあ、あんなに云ひわけをしても、信じて呉れないの。

男 おれは信じられないんだよ。

女 まあ、口惜しいわねえ。鶴沼へ行つたなんか、何でもありませんもの。妾、芝勇さんの取巻きで
行つたんですもの。安島さんと變だなんて、随分人を馬鹿にしてゐるわねえ。あなたが、そんなに
疑ぐり深いのなら、妾死んでしまふわ。

男 さうか、ほんたうに死ぬか。

女 え、死ぬわ。

男 本當に死ぬか。
 女 でも、そんな事疑はれて死ぬのは、いやだわねえ。
 男 やつぱり、死にたくないんだね。
 女 でも、妾一月位待つて貰ひたいわ。せめて長唄會が済むまで待つて貰ひたいの。妾が、死ぬと、
 「傾城」のタテを歌ふ人がないんですもの。
 男 馬鹿！ そんなことを考へてゐて死ぬるか。
 女 だつて、死ぬにしても、遺書を書かなきゃいけないわ。
 男 お書きよ。遠慮なく。
 女 あなた嘘でせう。そんな冗談のやうに云つてさ。
 男 嘘なんか。俺は、ちゃんと遺書をかいてる。御覽！
 (男、トランク中から白い封筒を取り出して見せる)
 女 まあ。
 男 どうだい。俺は嘘を云つてないだらう。
 女 一寸、これ讀んでもいいでせう。
 男 いやだよ。
 女 讀ましてよ。
 男 駄目だい。馬鹿！

女 よましてよ。わたし、あなたがどんな事書いてあるか讀みたいのよ。
 男 駄目だ、いけない。
 女 よましてよ。わたし、どんな事があつてもよむの。
 男 馬鹿！ 讀んで目を廻すなよ。
 女 え、目は廻さないわよ。(女、恐々封を切る)
 男 (笑ひ出す) は、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、馬鹿。
 女 (女封筒の中から、紙片を取り出しじろく見る) まあ、あなたこれ白紙ぢやないの。
 男 さうさ。いけないか。
 女 まあ、ひどいわ。あなた！
 男 だつて、ほんたうの遺書が出たら、お前困つただらう。
 女 だつて、ひどいわ、……(女急に笑ひ出す) は、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、白紙はよかつたわねえ。
 男 まだ心中なんか、してたまるか。
 女 ぢや妾をためして見たの。
 男 さうだ。
 女 卑怯だわねえ、男のくせに。
 男 何が卑怯なものか、お前のやうな浮氣者は、時々試さなきゃ。
 女 ぢや、今日試した結果は、どうだつたの。

女中 はい。

(匆々として去る)

女 ねえあなた、歸りませうよ。奥さんのことを思つてゐる人と一緒にゐたつてつまらないわ。
(男、欄干にもたれて無言)

—幕—

相

似

(A Farce)

人物

蕎麥屋の主人

その妻

出前持の男

電話を借りに来る老婆

電話を借りに来る女

その他数人

舞臺 郊外のやゝ繁華なる町にある蕎麥屋の内部。右手は床を上げて疊を敷いてある。左手は土間から板の間になり、直ぐ二階へ上る階段がある。階段の右側に、電話がある。電話の右側の壁には、幾段もの棚が取り付けてあり、棚には出前の箱、ビール瓶、正宗の小瓶、等が這入つてゐる。疊敷の壁には、「東京蕎麥餛飩商組合」の木札が掛けてあり、その左右に、色々なポスター、「もりかけ八錢」の札などが貼りつけてある。奥の方は、側に格子があり、真ん中に暖簾が掛けてある。奥で、主人や女房、小女達の働いてゐるのが見える。

幕開く。夕暮近き頃。客が三人、銘々の位置で蕎麥を喰つてゐる。電話が消魂しく鳴る。小女が電話に掛る。

小女 あ、もしく、いゝえ、違ひます。こちらは七十五番です。(受話器をかける) また大塚の見番と間違つて掛つて来た。

客一 (身づくろひをして襟巻をしながら) おい、勘定。

主人 どうも有り難う御座います。お銚子は三本でしたね。

客一 あ、さうだ。

主人 一圓十錢頂きます。

客一 ぢやあ、これで取つてくれないか。(五圓札を出す)

小女 どうも有り難う御座います。(小女五圓札を受取り奥へ行つて、釣銭を持つて来る) へい、どうも有り難う御座います。

(客一去る。間。：：小僧が這入つて来る。)

小僧 鈴木メリス店です。親子を二つ大急ぎで。

主人 はい、有り難う御座います。

(小僧去る)

主人 (小女に出前の箱を示しながら) おい出来たよ。

小女 お菓子屋さんですね。

主人 さうだ。

(小女、出前の箱を持つて出て行く。奥から女房が出て来る。二十四五の粹な水々した女。客一の去

つた跡を取り片附ける)

客二 おかみさん、お幾らです。

女房 三十錢頂きます。

客二 ぢや、これでお釣を下さいな。

女房 はい、有り難う御座います。五十錢で三十錢のいただき。

(主人二十錢を奥から持つて出る。女房それを客に渡す)

女房 どうも有り難う御座います。

(客二去る。小女歸つて来る。：：間。：：電話けたましく鳴る。小女電話に掛る)

小女 あ、もしく、あさうです。はいく、いらつしやいます。(奥へ向ひ) おかみさん、日本橋のお宅から電話です。

女房 あ、さうかい。(そゝくさと電話へ掛る) あゝ、さうですか。あ、さう、あ、さうですか。えゝ、えゝ、でも...えゝえゝ、さうですね... (奥の主人の方へ向ひ) ねえ、ちよいと。

主人 何だい。

女房 (やゝ云ひ難くさうに) あの、日本橋の家から電話ですがねえ、今大森の姉が来てゐるんですが、

ねえ。久しぶりだから、ちよいとでもいゝから来いといふのですが、行つてはいけないでせうか。

主人 何、大森の姉さんが来てゐる。

女房 えゝ、私もちよいと會ひたいのです。去年の十月から會はないんですもの。

主人 ぢやあ、ちよつとだけ行つて来ていいよ。

女房 さう、うれしいわ、あたし。(生々として電話に向ひ)ぢやあ、あたし行くわ。さうだね、どうしても四十分位はかゝるわ。えゝゝゝ、なるべく早く行きますから。ぢやあ後ほど。

(女房電話口を離れて奥へ行く)

客三 ぢやあ、こゝへ置いて行きますよ。十六銭ですわね。

主人 左様で御座います。どうも有り難う御座います。

(客三去る。電話が掛つて来る。小女電話に掛る)

小女 あ、もしゝゝ、はいさうです。はい左様で御座います。はい分つてゐます。鴨なんばん五つと、かけを十一で御座いますね。えゝゝゝ分りました。鴨なんばんの中で二つが、うどん臺ですわね。はいゝゝ、畏まりました。どうも有り難う御座います。(電話口を離れながら)荒神裏の大森さんで

鴨なんばんを五つ、二つが、うどん臺、かけが十一。

主人 かけは蕎麥かけだね。

小女 えゝゝ。

(女房奥から拵らへをして出て来る。黒縞子の襟のかゝつた銘仙の着物に對の羽織)

女房 ぢや行つて参ります。

主人 早く歸つて来なきやいけないぜ。

女房 えゝゝ。

主人 八時頃までには歸つて来られるだらう。

女房 えゝゝ。

主人 日本橋の姉さんよろしく云つてくれ。

女房 えゝゝゝ、ぢや行つて参ります。(いそゝと出かける)

(女房と入れ違ひに、出前持の男歸つて来る。すぐ後から六十位の老婆が這入つて来る)

老婆 横丁の吉澤ですが、電話をちよつと貸して下さい。

主人 はい、どうぞお使い下さい。

(老婆電話へかゝる)

老婆 あ、もしゝゝ、浪花の二千八百三十五番。あゝさうです、三十五番ですよ。…。(間)…あ、もしゝゝ、立花屋さんですか。あ、さうですか、こちらは向島の岡田ですがねえ、あゝさうですよ。おかみさんちよつと電話口まで呼びになつて下さい。はいゝゝ、あ、奥さんですか、私です。吉澤ですよ。しばらくで御座います、お變り御座いませんか。ねえ奥さん、今ねえ、あちらが

いらしつてゐるんですよ。ちよつとでもいゝからお目にかゝりたいと云つて、いらつしやるんです。何とか御都合していらつしやいませんか。ぜひ、お會ひになりたいとおつしやつてゐるのですよ。はいゝゝ…。(老婆、店内の容子をジロ／＼見る)はいゝゝ、さうですか。いらつしやいますか。ぢや、お待ち申して居ります、なるべくお早くね。(電話口をはなれる) どうも、ありがたうございます。(去る)

主人 何ういたしまして。

出前持の男 お婆さん、また電話賃を置かないんだね。

主人 あひぶきの打ち合せなんかしやがるくせに、電話賃を置きやがらねえ。

出前持の男 そのくせ、注文だつて、十日目に、かけを三つ位ですからね。

主人 全くひき合やしない。……(ふとある不安に囚はれる)おい、およし。

小女 (奥から) はい。

主人 さつき、日本橋から電話がかゝつて来たときねえ。

小女 ええ。

主人 どんな聲の人が出た？

小女 小さな聲つて？

主人 男だつたかい、女だつたかい。

小女 女でした。

主人 うん。日本橋の姉さんの聲、お前知つてゐるか。

小女 知りません。

主人 さうか。

(主人ある不安に囚はれる)

主人 おい、吉藏！ 日本橋の家は電話の呼び出しは、利かなかつたかね。

出前持の男 何とか云ふ洋食屋へかければ呼び出してくれるんですがね。おかみさん丈御存じなんですよ。

主人 うん。(黙然とする)

(……(間)……)

出前持の男 旦那、さつきの電話は、よその奥さんか何んかをひっぱり出すものでは。

主人 (いよゝゝ不安になつて) ふてえことをしてゐやがる。(此間、一時間ばかりの時間の経過を示すため、舞臺を一寸暗くする。明るくなると、すっかり夜に入つてゐる。電話のベルけたましく鳴る。小女電話にかゝる)

小女 あゝもしく。はいく左様でございます。はい、はい、畏りました。(電話を離れる 杉野さんのお邸で、かけを九つ大急ぎ)

主人 おい、もう何時だ。

小女 八時少し前です。

主人 遅いな、おけいの奴。

(二人連れの學生、這入つて来る)

小女 いらつしやいませ。

學生一 君、そば？

學生二 おれは、うどんだ。

學生一 うどんかけ一つ、そばかけを一つ。

小女 はい、かしこまりました。

學生一 二日頃に発表になつて、十五日までに終るかしら。

學生二 もつとかゝるだらう。

學生一 二十日頃になるかな。

(先刻の老婆這入つて来る)

老婆 すみませんが、もう一度電話を貸して下さいな。

主人 (不承々々に) はいどうぞ。

老婆 (戸外へ向ひ) さあ、どうぞ、御遠慮なく。いつも貸して貰つてゐるのですよ。

(二十四五の女、奥さま風、丸髷に結び、黒襟のかゝつたお召の着物を着たいきな女が、這入つて来る)

女 御免下さい。

主人 いらつしやいませ。

女 毎度どうも電話を。こゝへ電話賃を置きます。(五十銭銀貨を冷蔵庫の上へ置く。電話へかゝる)

もしも浪花の二千八百三十五番。さうです、さうです。もしも立花屋ですか。あゝお前は辰吉

かい。わたしですよ。あゝさうです。旦那さま、いらつしやる。一寸、電話口まで、およびしてく

れない。はいく、あゝもし、旦那ですか。わたしです、今里へ來てゐるのですよ。姉が少し振

りだから一緒に浅草へも行つて御飯を喰べないかと云ふのですよ。えゝ。えゝ。あのう、少しお

そくなりましてもしやうでせうか。えゝ九時まではきつと、かへれますわ。ぢや左様なら。

(主人、電話をきいてゐて、全く不快な表情になつてしまふ)

女 どうも、失禮しました。

主人 (冷蔵庫の上の五十銭を取り上げながら) 一寸お待ち下さい。これをどうぞ、お持ちかへりにな

つて下さい。

女 いゝえ、どうぞ。受取つて下さい。電話をお借りしたお禮ですが。

主人 いゝえ、私の方は、そばやが商賣ですが、電話をお貸して餘分なお金をいたゞくのは、商賣ぢ

やありませんから。

學生一 茲へ金を置いておくよ。(學生去る)

女 (主人の劍幕の荒いのに辟易しながら) ぢや五銭丈でも、置きますわ。

主人 ぢや二銭、おつりをさしあげませう。

(二銭つりを渡す)

老婆 いやに、堅くるしいことを云ふ人だね。奥さん、今度から向ふの自動電話へ行かばうか。

(老婆と女、匆々として去る)

主人 (二人の後を見送りながら) ふてくされ女め……

出前持の男 だが、旦那いゝ女ですね。

主人 いくら女がよくつたつて、あんな者を女房に持つちや、やり切れない。
出前持の男 だが、全くいゝ女だ。

(電話けたましくかゝる。小女、電話に出る)

小女 あゝもしく、さうです。あゝ、おかみさんですか。一寸お待ち下さい (電話をはなれ) 旦那

那、おかみさんから電話ですよ。

主人 なに！ (血相が少し變る) おい／＼おけいかい。なに、久し振りだから、一緒に御飯をたべ
るんだつて！ なに九時には歸れるつて。いけない！ いけないつたら！ 今何處にゐる？ なに
なに、はつきり云へ！ いけない！ 直ぐ歸つて來い。歸らなきや、俺が連れに行くから、さう思
へ！ えゝ、ぐ／＼云はずと直ぐかへれ！ 歸るか！ よし。

(電話器を投げつけるやうに置く)

出前持の男 旦那、何うしてさうガミ／＼云ふのです。

主人 何うしたつていゝ、だまつてゐろ。

(先刻の老婆、のこ／＼這入て來る)

老婆 上等の天どんを二つ。

主人 なに二つ？

老婆 なるべく上等をね。

主人 お生憎さま、天どんは種切れたよ。

老婆 もう、種切れかい。だから、場末の喰物屋は……。

主人 (するどく睨む)

老婆 ぢや、ほかへ行つて、頼みませう。ほんたうに此の家は商賣を知らない家だ。

主人 勝手にしやがれ！

老婆 えゝ勝手にしますよ。

出前持の男 旦那、海老はありますよ。

主人 うるさい、だまつてゐろ！

(出前持の男駭いて、だまつてしまふ。主人のやるせなき焦躁と不安の裡に暮)

兄の場合
(戀愛病患者後日譚)

人物

佐々木貞一

ある専門學校教授、六十三、四

さだ子

その妻、五十三、四

哲夫

彼等の長男、文學士、二十八、九

敏子

彼等の長女、他家へ嫁いでゐる、三十一、二

松村謙一

敏子の夫、醫科大學助教授

久美子

彼等の次女、嫁がずにゐる、二十四

(凡て、自作「戀愛病患者」の人々と同じ。たゞ當時より、六七年時が經つてゐる)

所

東京の山の手

時

現代

情 景 佐々木貞一の家。二階建、七間か八間かある。階下には八疊と六疊がつゞいてゐる。舞臺は

八疊の間。客座敷に使ふと見え、よく片づいてゐる。床の間には相當立派なものであるらしい南畫

の山水がかけてある。青磁の花瓶に何も花がない。床の間わきの違ひ棚の下に書冊がおいてあり、その上に和綴の本が體よく置かれてゐる。家全體はやゝ古びた感じがする。縁側近くさだ子と敏子と久美子とが首を鳩めてゐる。久美子は手に電報を持つてゐる。

久美子 テッポウドウハン十ジウエノチャクですつて。

さだ子 どれ！（電報を取つて見る）あゝよかつた。うまく會へたのね。

敏子 家の人が、行つたから、きつと連れて歸つて来ると思つてゐたの。

久美子 でも、兄さんは剛情だからどうかと思つてゐたわ。剛情のところ丈が、お父さまによく似てゐるのよ。

敏子 こんなになるまで、家では分らなかつたの。

久美子 時々、遅く歸つて来てゐたわ。

敏子 哲夫さんは、學校のときからだつて、随分眞面目だつたぢやないの。

久美子 今だつて、眞面目は眞面目よ。

敏子 だつて相手は、四谷かどつかの藝者だと云ふぢやないの。

久美子 でも仕方がないわ。愛し合つてゐれば。

敏子 （久美子の寂しさうな容子に打たれ）さうね。

さだ子 あゝいやだ！ いやだ！ また、お父さまと一さわぎ始まるんだね。

敏子 さうね。久美ちゃんするときなんか、相手がちゃんとしたいゝ家の息子さんだつて、あんなに剛

情を張り通すんだもの。——山崎さんは、どうしてゐるの。

久美子 （顔をそむけ）知らないわ。

敏子 學校は出たの。

久美子 出たでせう。

敏子 あれから、半単位して、また向ふから話があつたと云ふぢやないの。

久美子 （だまつてゐる）……。

敏子 向ふには、充分誠意があつたのにな。

久美子 （うつむいてしまふ）……。

敏子 お父様は何ておつしやつてゐるの。

久美子 何を？

敏子 哲夫さんの家出のことを。

久美子 何ともおつしやらないの。兄さんがいらつしやらなくなつてから、二階へあがつたきりで、

御飯のときやつとおりにくるだけよ。

敏子 哲夫さんを家へ入れないと云やしないかしら。

久美子 さあ。

さだ子 久美子のときなんか、久美子が泣き寝入りになつたから、圓く治まつたものゝ、今度はどんなになることだらうか、お母さんには分らないね。

敏子 でも、今度は私は哲夫さんに賛成できないわ。へんな藝者を藝者家からつれ出すなんて。

さだ子 でもよくお前のところへ、手紙をよこしたものだね。

敏子 心中か何かするつもりで行つても、さう安々と死ねなかつたのでせう。

さだ子 お、恐い／＼。

敏子 お父さんの頑固なのが、分つてゐるので絶望的になるのよ。

さだ子 お父さまも、お年のせるで、前よりはよつほどよくなつたけれども、こんなことになると思は
變らずだらうね。

敏子 でも、今度なんか仕方がないわ。四谷の藝者なんてきつとみずてん藝者よ。そんなものどうし
たつて、家へ入れられないぢやないの。哲夫さんによく話して思ひ切らせるのね。

さだ子 だから、私は二三年前から、はやくお嫁を／＼と云つてゐたのですよ。でも、それが久美子
にたいへん同情して、久美子が結婚するまでは結婚しないと云つて居るものだから、到頭こんなこ
とになつてしまつたの。

敏子 此間の地方裁判所の判事とか云ふ口なんか、随分いゝ口ぢやなかつたの。

さだ子 でも、久美子がすゝまなくつてね。

敏子 久美ちゃんも、いゝ加減に考へ直して、いゝ所があつたら行つたらどう？

久美子 ……………。

敏子 哲夫さんが、よく云つてゐたぢやないの、お父さんに對する面當に、媒妁結婚なんかするな、

なんて。あなたも、まさかそんな氣ぢやあるまいだらうね。

久美子 (うなづく) ……………。

敏子 二十四なんて、大切な年だわねえ。もつとよく考へたらどう。

さだ子 わたしは、子供が二人しかいないんだが、どうしてその少い子供で、こんなに苦勞するのだら
う。

久美子 すみません。

(三人だまつてしまふ。しばらく時が経つ)

さだ子 ほんたうに、謙さんにはすまないわねえ、久美子のときと云ひ今度と云ひ、迷惑なことばか
り頼んで。

敏子 お母さん、久美ちゃんのときは、なるべく云はない方がいゝわ。家の人なんか、あれで
おつちよこちよいだから、こんな世話をやくのは一番欣んでゐるかも知れないわ。

さだ子 まあ！

(自動車の音が、はるかに聞える)

敏子 (聞耳を立て) 家の人かも知れないわ。

久美子 どうして。

敏子 家の人、よくタクシイにのるのよ。

(自動車の音、だん／＼近くなる。戸外に止まつたやうな氣勢がする。敏子そは／＼と立ち上る)

敏子 きつと、家の人だわ。(玄關へ行く)

さだ子 (不安さうに) どうなることだか。

久美子 兄さんは、きつと反抗なさるわねえ。

さだ子 なるべくお父さまの、お氣にさはらないやうに、圓くをさめたいものだわね。

久美子 でも、兄さんのことだから、きつとさうは行かないわ。

(敏子あはたぐしく、這入つて来る)

敏子 やつぱり家の人よ。

久美子 兄さんは。

敏子 歸つて来てよ。お父さんと、あくまで戦ふなんて、氣違ひのやうに激昂してゐることよ。

さだ子 まあ。

哲夫 (姿は見えないで) いや、お父さまにすぐお目にかゝりますよ。僕は、何もあなたを介して了解をして貰はねばならないほど、わるいことはしてゐないのです。

謙一 (同じく姿は見えないで) まあ、さう云つたものぢやない。氣をしづめたまへ。今、君がいきなり會つたら、どんなことになるか分らないよ。先づ、僕がお父さんに會つてよく話をするから。

(二人云ひ争ひながら、這入つて来る)

哲夫 いや、いゝです。僕は……(ふと母や妹の姿を見てだまる)

さだ子 まあ!

久美子 兄さん、お歸りなさい。

哲夫 (母に) 心配をかけてすみませんでした！ かにんして下さい。(妹に) 久美ちゃん、かにんしておくれ。兄さんがあやまる。

久美子 まあ。

哲夫 (敏子に) 姉さん、いろいろ兄さんにめいわくをかけたのです。あなたからも、よく感謝して置いて下さい。

敏子 でも、よかつたわ。今も三人で、どんなに心配してゐたか分らなかつた。

謙一 ね、哲夫君。みんなあんなに心配してゐるのだから、此上お父さまと衝突をするなんて、お母さんや久美ちゃんにわるいぢやないか。

哲夫 だつて、親父が親父なんだからな。

謙一 まあいゝよ。とにかく、君は奴方へ行つてゐたまへ。お母さまともよく御相談して、お父さまにお話するから。

哲夫 いや、僕は凡てを自分で解決しますよ。たゞ、あなたに来ていたゞいたのは、警察の方で僕達に、心中でもすると思つて、引取人が来ないと解放しなかつたからですよ。

謙一 まあ、僕に委したまへ。ねえ久美ちゃん、兄さんを彼方へ連れて行つてくれないか。

久美子 兄さん、後生だから、お部屋へいらつしやいませ。

哲夫 あゝ、久美ちゃん。俺はつくづくさう思つたよ、久美ちゃんの問題のとき、どうしてもつと、

謙一 いや、手でもないらしいんだ。それほど、頭がのびる女でもないんだよ。たゞ分らず屋で、ヒス

テリィで、熱情のかたまりのやうな女だ。

敏子 ぢや、女の方もほれてゐるのね。

謙一 それは、むろんだよ。たゞ、あんな女、とても、話にも何にもならないよ。

敏子 哲夫は、どうかしてゐるのね。

謙一 全く一時の迷ひさ。お父さんの所謂、病氣だよ。熱にうかされてゐるんだよ。哲夫さんは、美

學をやつたんぢやないのですか。

敏子 さうよ。

謙一 それで、あんな女が美しく見えるのかしら。

敏子 あなたが、さう云ふのなら、よつほどねえ。

さだ子 まあ、そんな女ですか。

謙一 あんな女は、どんな手段に依つてゝも、あきらめさせるのですね。

敏子 ぢや、哲夫さんは味方なしですね。

謙一 相手を一目見て御覽、とてもあんな女と一しよにさせるなんて。(さだ子に) 一つお父さんとも

よく御相談したいですね。御都合はいかゞでせうか。

さだ子 はい、畏りました。ぢや、一寸都合をきいて参りませう。(さだ子、やゝ不安らしく座敷を出て行く)

謙一 お父さんと、御相談して、いゝ方法を取るんだな。

敏子 さうですね。でも、そんなに思ひつめてゐるのでしたら。

謙一 哲夫君は、初めの女だから、あんなにのぼりつめてゐるんだよ。

(二人は、しばらくだまつてゐる。さだ子這入つて来る)

さだ子 すぐに、降りて参るさうでございます。

謙一 あゝ。さうですか。

敏子 お父さまの御機嫌は。

さだ子 お父さまの御機嫌ばかりは、昔から妾にわからないんだよ。

(暗く不安な沈黙。やがて二階の階段を降りる音がする。開けられた襖の間から彼等の父が出て来る。

真白な頭、色の白いやゝ感情的な、娘達の美貌が、なるほどとうなづけるほど、整つた顔の老人。

息子の家出について何も考へてゐないやうな悠々たる態度を示す)

貞一 (謙一に) よう、暫く。

謙一 暫く、いつも御無沙汰ばかり致しまして。

貞一 いや、それはお互さまだ、いつも達者かな。

謙一 はい、お蔭で。

貞一 學校の方は、毎日行つてゐる？

謙一 はい、毎日行つてゐます。

貞一 此間は、おめでたう。いよく論文が通つたさうで。
 謙一 いや、恐れ入ります。
 貞一 一度お祝ひに行かうと思ひながら、つい。
 謙一 いや、それには及びません。
 貞一 この間、恩賜賞を授けられたのは、あれはあなたの方の……。
 謙一 山路博士ですか、え、さうです。
 貞一 癌の研究も、いくらか目鼻がついたやうですね。
 謙一 (肝心の問題にふれる機会がないので、イラ／＼しながら) ついたやうです。でも、私なんかま
 るつきり。
 貞一 なるほど全然料が別ですね。
 謙一 お父さま、實は哲夫さんのことで、一寸お話がしたいのですが。
 貞一 うむ、そんなことをさだ子が云つてゐました。
 敏子 妾は彼方へ行つて居ませう。
 謙一 うむ、それがいい。
 (敏子去る)
 謙一 外でもありませんが、哲夫さんをおつれして歸つたのですが。
 貞一 それは御苦勞。どうもとんだ奴で。

謙一 それで、御承諾もなしにと、にかく家へお連れして歸つたのですが。
 貞一 仕方がありません、長男ですから。
 謙一 どんな婦人と一しよだつたか、御存じですか。
 貞一 (暗い顔になり) 知つてゐます。向ふの藝者家の方から、私にかけ合ひがありました。
 謙一 さうですか。それは、おどろきました。
 貞一 ……
 謙一 さぞ、御立腹でございませうが、哲夫君としては生れて初めての失策ですからね、これは一つ
 御寛大に考へていただきたいのですが。
 貞一 ……
 謙一 哲夫君は今、たいへん激昂して居られるのです。お父さんが、何かおつしやられると、すぐ又
 家を飛び出すかも知れないと思ふのです。それで、何もおしやらないで、ゆるしていただきたいの
 です。
 貞一 何も云はないと云ひますと。
 謙一 哲夫君は、かう云つてゐるのです。その女と、一しよになることを、父が承諾すれば家に止ま
 るが、でなければすぐに家を出るとかう云つてゐるのです。ですから、貴君が頭から、反對なさる
 と、どんなことになるかも知れないのです。
 貞一 (腕をくんで考へる)……………

謙一 お父さん、あなたがそんなことを、おつしやつちや困りますね。

貞一 俺は、久美子ですつかり、こりてしまつたんだ。どうも、戀愛は病氣かもしれない。が人間はこんな病氣でもなければ、無我夢中の幸福は味へないのだ。それを無理に癒してしまふと、却つていつまでもその幸福が思ひ切れならしい。

謙一 ぢやお父さんは、哲夫さんを許さうと云ふのですか。

貞一 許すのぢやない、仕方がないと思ふのだ。仕方がない病氣だ。たゞ、そのまゝにして置くより

仕方がない病氣らしい。

謙一 お父さん、そんな馬鹿な。

貞一 いや、わしは此六七年考へたよ。

(闕の向ふにゐた久美子、わつと泣き出す)

貞一 (初めて久美子の存在に気がつき) 久美子か、ゆるしてくれ。そんなに、泣かないでくれ。ないてお父さんをいぢめないでくれ。お父さんが、わるかつたことはよく知つてゐるんだよ。それより、行つて哲夫をよんで来てくれ。よく、あいつの話を書いてやらう。出来ることならあいつの希望を容れてやらう。同じ問題であいつまで、臺なしにするわけには行かぬからなあ……。

(貞一、腕をくむ)

—幕—

時と戀愛

第一幕

人物

成田 伸一 二十六七の青年

み つ 枝 彼の新婚の妻、二十三

佐原 秀雄 彼等の知人、小説家三十位

その他二三の人

所

東海道蒲郡

時

現代

情景 廣大なる旅館の一室、小松の生えた廣い庭園に面してゐる。庭園の盡くるところは石崖にな

つてゐる。下はすぐ波しづかな渥美灣にのぞんでゐる。沖に松の茂つた小島が見える。幕開くと、み

つ枝が縁側近い机に向つて手紙を書いてゐる。伸一が庭下駄をはいて、散歩から歸つて來る。

伸一 どうだい。手紙は、すっかりかけたかい。

みつ枝 いゝえ。まだお姉さまに出すのが残つてゐるの。

伸一 あなたは、一通の手紙をかくのに、何時間かゝるのたい。

みつ枝 だつて、どうかいていゝか、分らないんですもの。

伸一 どれ、お見せ。

みつ枝 (机の上を両手で掩ひながら) いやだわ。いやだわ。御覽になつちやいやだわ。

伸一 俺の悪口でも書いてゐるのぢやないか。

みつ枝 まあ!

伸一 ぢや、お姉さまに出す分は、晩にすればいゝぢやないか。

みつ枝 えゝさうするわ。

(みつ枝、書き了へた二三通の手紙を封筒に入れ、封をする)

みつ枝 ポストは、近くにないかしら。

伸一 女中を呼んで頼めばいゝんだよ。呼鈴は、どこだつたかな。

(呼鈴をさがして押す)

伸一 山の上に、驢馬がゐるね。

みつ枝 さう。

伸一 あいつに一つ乗つてやらうかね。

みつ枝 あなたなんか乗ると、驢馬が押しつぶされやしない。

伸一 まさか。俺は、割合軽いんだよ。これで、十五貫しかないよ。

みつ枝 さう、妾は十一貫よ。

伸一 それで十一貫あるかな。

みつ枝 妾、目白にゐたときは十一貫五百まであつたのよ。この頃、少しやせたのよ。

伸一 やせて結構だよ。俺は、ぶく／＼した奴はきらひだ。

みつ枝 だつて、貴女は秀子さんを好きだつたぢやありませんか。あの方は、妾達の仲間ぢや一番肥つてゐたのよ。

伸一 秀子さんを好きだつて、嘘を云つちや困るよ。

みつ枝 だつて、貴方は築地へ秀子さんを連れて行つたと云ふぢやありませんか。

伸一 だつて、あれは一度ぎりだよ。

みつ枝 どうですか。

伸一 あなたこそ、つい此間まで、佐原の家へ、たび／＼行つたと云ふぢやありませんか。

みつ枝 佐原さんなんか、いやだわ。

伸一 どうだかな。あまり、さうでもなかつたよ。手紙なんかも、随分やつたと云ふぢやないか。

みつ枝 そりや、愛讀者としてだわ。妾、あの方の『戀愛の彼方』といふのが、一寸好きだつたのよ。今は、あの方のかくものなんか、大きらひだけど。

伸一 そんなに、佐原のことを悪く云つちやいけないよ。あなたと僕とが、初て知り合つたのは、佐

原の家だもの。

みつ枝 さうね、佐原さんがゐなければ、妾達は知り合ひになつてゐないわね。

伸一 あなたは、佐原とは、ほんたうに何でもなかつた？

みつ枝 むろんだわ。第一あんな神経質な人きらひだわ。

伸一 ほんたうに大丈夫？ キスをしたのぢやない？

みつ枝 いやだわ。馬鹿らしい。あんなに辯解して置いたのに。しつこいわ。そんなにしつこい人きらひ。

伸一 嘘だよ。冗談だよ。お前は、すぐブリ／＼するんだね。それよりか一しよに、モウターアボウトにでも乗らうか。

みつ枝 えー！ いゝわねえ。

伸一 (海の方を見て) 困つたな。潮があんなに干いてゐるな。

(女中、這つて来る)

女中 御免下さいませ。あのう、佐原さんと言ふ方、御存じでございますか。

伸一 え、佐原！

(みつ枝と顔を見合はす)

みつ枝 え、知つてますわ。佐原さんが、どうして。

女中 此の二階に丁度宿り合はせていらつしやいますのよ。今日那さまのお歩きになつてゐるのを、

御覽になつたのですつて。お差支へなければ、お話伺ひたいと仰しやいます。

みつ枝 まあ、佐原さんが。

伸一 うーむ。

みつ枝 どうしませう、あなた。

伸一 何も、そんなにおどろくに當らないぢやないか。

みつ枝 だつていやだわ。佐原なんか、會ひたくないわ。

伸一 何を云ふんだい。別に差支へないぢやないか。

みつ枝 だつて。

伸一 いゝよ。(女中に) 差支へありませんから、よろしくと云つて下さい。

女中 かしこまりました。

(女中去る)

伸一 佐原に會ふのが、どうしてそんなに恐いんだ。そんなに狼狽すると、却つて俺は疑ふよ。

みつ枝 あら、いやだわ。何も、恐いと云ひはしないわ。たゞ、きまりがわるいし、いやだわ。あんな人に會ふと、きつと、皮肉を云ふに定まつてゐるわ。

伸一 いゝぢやないか。二人のこまやかな新婚ぶりを見せてやると、どんな皮肉屋だつて、辟易するに違ひないよ。

みつ枝 だから、妾浦郡なんか、いやだと云つたのよ。すぐ、京都まで行けばよかつたわ。

伸一 なに、一度佐原君にだつて、會はなきやいけないのだよ。あなたが、あの人と清淨潔白なら恐

がることはないぢやないか。

みつ枝 その點は、安心して下さいよ。妾、そんなんぢやないわ。

伸一 ぢや、あわてる必要はないぢやないか。

(二人不快の表情を浮べたまゝ、無言。間——女中の去つた次の間で、佐原の聲がきこえる)

佐原 這入つてもいいかい。

伸一 どうぞ。

(佐原現はれる。顔の長い神経質な顔、髪をオールバックにしてゐる)

佐原 やあ、失敬。

伸一 やあ、失敬。

佐原 みつ枝さん、しばらく。

みつ枝 しばらくでございます。

佐原 駭いただらう、僕が、突然飛び込んで来たので。

伸一 別に駭きもしないが、少しは意外だつた。

佐原 僕が飛び出すのは、少し可哀相な氣もしたがねえ。僕も、五六日茲にゐて、人に飢ゑてゐたものだからね。つい、話したくなつたんだよ。新婚の君達をさわがすのは、罪なこともよく分つてゐるがね。

伸一 なにいゝさ。

佐原 まさか、僕が茲でひよつくり、飛び出さうとは思つてゐなかつたらう。

伸一 結婚式の案内狀は、さしあげて置いた筈だがね。

佐原 貰つたよ。だが、僕なんか、あゝ云ふ儀式はまつぴらだからね。あんなに人を窮屈にさせると

ころは、眞平だよ。

伸一 さうかな。だか、割合に皆来てくれたよ。

佐原 さうか。それは結構だつた、(みつ枝をぢつと見て) みつ枝さんは瘦せましたね。

みつ枝 さうですか。妾自分では、氣が付きませんわ。

佐原 急に人妻らしくなつてしまひましたね。

みつ枝 さうですか。妾ちつとも變つてゐないつもりだわ。

佐原 貴女が、最初僕の家へ来てゐた頃は、子供々々してゐて、よかつたね。

みつ枝 ……。

(三人黙つてしまふ。一座白ける)

佐原 これから、どつちへ行くんだね。

伸一 京都、奈良、寶塚……。

佐原 あはゝゝゝ、通俗小説などに出て来る新婚旅行のプログラムそつくりだね。

伸一 (一寸ムツとして) 悪いか。

佐原 悪いとは云ひはしないよ。だが……。

伸一 だが、どうしたんだい。

佐原 僕なんかには、そんな型通りなことは眞平だよ。君達だつて、戀愛結婚なら、戀愛結婚らしく

少しは型を破つたらどうだい。

伸一 僕は世間並にするのが、好きなんだよ。まあ、僕達の思ひ通にさせ給へよ。

佐原 俺なんか、黙つて引き下つてゐると云ふのか。あはゝゝゝ。

みつ枝 吉野さんも、結婚なさいましたわねえ。

佐原 うむ、したよ。

みつ枝 奥さまは、英學塾の御出身ですつて。

佐原 さうらしいな。

みつ枝 美しい方ですか。

佐原 どうだか知りませんよ。

伸一 この頃の若い小説家は、たいてい結婚してゐるね。山岡、小川、長野、關、結婚してゐない人

はないぢやないか。

佐原 だから、僕にも結婚しろといふのかい。

伸一 君は、いくつだつたかね。

佐原 三十二だよ。

伸一 結婚しても早い方ではないね。

佐原 僕は、結婚なんかする奴の氣が知れないんだよ。

伸一 (やゝ青くなりながら) なぜさ。

佐原 なぜつて。僕達が生涯を通じて、たつた一人の女を愛するなんて、そんな恐ろしい約束が出

来るかね。

伸一 出来るさ。

佐原 さう簡単に云はないで、ほんたうの意味だよ、ほんたうの意味で、二十年も三十年も、悪く

すると四十年も、一人の女を愛しつづけるなんて、そんな約束が出来るかね。

みつ枝 出来るわ。妾達はしたわ。

佐原 そりやいゝ加減なところでは、出来るかも知れないよ。だが、或る一軒の家に生涯住むなん

て約束だつて僕には容易に出来ないよ。まして、結婚するとすると、その女と朝も晝も晩も散歩も

休憩も、食事も睡眠もみんな一緒にしなければならんだ。そんな約束が出来るかね。僕は恐し

くて出来ないよ。

伸一 愛してゐれば、一生涯はおろか、未來永劫にかけてまで出来ると思ふね。

佐原 さうかね。僕は、その戀愛と云ふものが、そんなにつづくものとは、思はれないんだよ。

伸一 なぜだ!

佐原 僕は、いつもさう思つてゐるんだがね。戀愛は、つまり性欲の變形だよ。性欲を根として咲い

た花だよ。戀愛を衣物の表とすれば、性慾は裏側だよ。

伸一 よしてくれ。そんな講義なんかよしてくれないか。そんな幼稚な戀愛觀なんか。

佐原 さう、頭ごなしにするものではないよ。まあきけよ。性慾と戀愛とは、戀愛理想主義者がどんなに云はうとも、到底離して考へることの出来ないものだよ。これは學者の定説だよ。

伸一 何とでも、云ひたまへ！ だが、われ／＼の戀愛は、そんな議論ぢや汚されはしないよ。

佐原 大にさうだらう。だが、性慾がなくなつて、戀愛だけがつくくなんて、僕には考へられないんだよ。ところがだ。性慾は感覺だらう。感覺だけに、僕はあきやすいと思ふのだ。同じ物ばかり喰つてゐると、我々の味覺はすぐ飽きてしまふぢやないか。同じ音を聴いてゐると、我々の聽覺はすぐ飽きてしまふぢやないか。性慾心だつて同じだ……

伸一 よしてくれないか。よさないと、僕は君を殴りたくなるよ。君は、我々の結婚生活を呪ひに来たのかい。

佐原 いや、さう云ふわけぢやないんだ。僕が結婚したくない理由を述べてゐるだけだ。

伸一 君が結婚しないのは君の勝手だよ。僕達の結婚にまで、ケチをつける必要がどこにあるのだ。人を馬鹿にするなよ。

佐原 あは、さうムキになつて怒らなくつてもいゝぢやないか。さうムキになつて怒ると、却つて君達の結婚生活に自信がなささうで、みつともないよ。

伸一 君には、ほんたうの戀愛は分らないんだ。ねえ、みつ枝さん。

みつ枝 さうだわ。性慾と戀愛とは、結局同じものだなんて、そんなことはとても考へられないわ。

佐原 さうかな。だつて貴女だつて僕の戀愛觀に一時は共鳴したことがあるぢやないか。

みつ枝 さうかしら、妾忘れたわ。

佐原 戀愛はきつとさめる。僕は、戀愛位たよりないものは、ないと思つてゐるよ。その證據に、戀愛結婚をした夫婦に限つて、ゴダ／＼が絶えないぢやないか。

みつ枝 妾の知つてゐる方達は、みんな仲がいゝわ。

佐原 僕は、戀愛で結婚した夫婦が、もうお互の熱情がさめてゐるのに、意地だけで、仲がよ／＼になつてゐるのを見たと、あれ位窮屈な夫婦生活はないと思ふね。

みつ枝 意地だけで仲がよく出来るでせうか。

佐原 だから、出来ないのですよ。出来ないものをしてしなければならぬのが、悲劇なんだ。

伸一 佐原君。君は、僕とみつ枝と結婚したことに不服なんかね。

佐原 馬鹿なことを云つちや困るよ。不服な譯がないぢやないか。

伸一 卑怯だよ、君は！ 不服なら不服と正面から云つたら、どうだ！ 僕達の新婚旅行の宿へ飛び込んで来て、そんなひどい、いやがらせを云はなくたつていゝぢやないか。

佐原 悪かつたね。僕の戀愛觀は持論だよ。つい口がすべつちやつたんだ。

伸一 我々は君に、ケチをつけられる覺えはないんだ。ねえ、みつ枝！ それともお前あるかい。

みつ枝 ないわ。絶對にないわ。妾斷言するわ。そんなことを訊かれるだけでも、くやしいわ。

(みつ枝涙ぐむ)

佐原 ないですとも。ないですとも。さう激昂されちやいやですよ。あは、う、う。僕だつて、君達の幸福を祈ることに於て、人後に落ちないよ。たゞ議論は議論だよ。

伸一 そんな議論を僕達の前でする奴があるか。幸福を祈るが、きいてあきれよ。

佐原 あは、う、う、君達は戀愛結婚の選手として、僕の議論と戦へばい、ぢやないか。

伸一 戦ふとも。

佐原 だが、戀愛結婚の敵は、むしろ内部に在るよ。君達の心の裏に。

みつ枝 いやなことばかり、おつしやるのね。もう澤山ですわ。

伸一 ほんたうに澤山だよ。もう歸つてくれないか。

佐原 もう少し、居させてくれないか。もつと潮が來ると、僕は黒鯛を釣りに出かけるんだから。

伸一 そんな潮待ちを、こんなところでされちやたまらないよ。

佐原 あは、う、う、君達がどんなに怒つたつて、僕は戀愛結婚の幸福が、さう長く續くものとは思は

れないよ。

伸一 馬鹿！ なぐるよ！

佐原 あは、う、う、到頭怒つたね。

伸一 歸れ！

佐原 歸るよ。まだ潮は充分でないが、風が出たらいかもしれないな。ぢや失敬しようか。どうも

つまらないことを喋べつて悪かつたな。みつ枝さん、失禮しましたよ。

みつ枝 (黙つたまゝ横を向いてゐる) ……

佐原 どら、黒鯛の大きい奴を二三枚ひつかけて來るかな。

伸一 君の釣針にひつかゝるやうな、まぬけた黒鯛があるかな。

佐原 かう見えても、釣にかちや自信があるんだ。僕の得意なのは釣と戀愛觀だよ。

伸一 まだ、ぐづぐづ云ふのか。

佐原 さう、せき立てなくとも歸るよ。

(佐原悠然として立ち上りながら去る。伸一、佐原が室を出るや否や、膝の前に在つた旅行案内を佐

原の坐つてゐた後へ投げつける)

伸一 馬鹿野郎！

みつ枝 いやな奴！ ほんたうに。

伸一 (餘憤をみつ枝に向けながら) お前佐原にあんなことを云はれる覺があるのか。

みつ枝 ないわ。そんなことまだ疑つていらつしやるの。

伸一 何もなければ、あんなにまでしつくくケチをつける必要はないぢやないか。

みつ枝 だつて、あの人はいやな皮肉屋なもの。わたし、大嫌ひだわ。

伸一 何だ！ 愛讀者だつたくせに。

みつ枝 でも、あんないやな人だとは思はなかつたわ。

伸一 人を馬鹿にしてやがる。彼奴は、あなたに惚れてゐたことがあるのぢやない？

みつ枝 妾には分らなかつたけれど。

伸一 きつと、さうなんだ。その戀の恨みなんだ。でなければ、あんな失敬なことを云ふ筈がない。

みつ枝 さうかも知れないわ。さうだとすると、いよいよいやな人ね。

伸一 あゝいやだ、いやだ。あんな奴に、ひよつくり出くはすなんて。

みつ枝 ほんたうだわ。お蔭でめちやくちやになつてしまつたわ。

伸一 あいつの云つたこと位で、めちやくちやになつてたまるかい。あいつに會つたために、俺達は

もつと愛し合はうぢやないか。

みつ枝 さうね。さうしませうね。

(二人しばらく無言)

みつ枝 (おづく) でも、愛と云ふものはさめるものかしらん。

伸一 馬鹿！

みつ枝 妾は、大丈夫よ。でも、あなたなんか心配だわ。

伸一 馬鹿を云へ。俺なんか絶対にさめるものか。

みつ枝 ほんたう。

伸一 ほんたうだとも。

みつ枝 ほんたうなら、うれしいわ。

伸一 お前は、大丈夫だね。

みつ枝 大丈夫だわ。妾、あなたと別れる位なら、死んでしまふわ。

伸一 ぢや誓はう。

みつ枝 えゝ誓ふわ。

伸一 (立ち上りながら) 此方へおいで。

(みつ枝、うなづいて立ち上り、二人抱擁せんとし、よす)

みつ枝 をかしいわ。草取りの女の人が見てゐるわ。

伸一 さうか。あゝゝゝ。

みつ枝 佐原さんが、出たゝめに、妾貴方に對する愛をほんたうに感じたわ。

伸一 ほんたうに、あいつは俺達の戀愛生活の最初の興奮劑だ。

みつ枝 ほんたうですわ。いゝ刺戟だつたわ。

伸一 俺達の戀愛がさめてたまるものか。

みつ枝 永遠に、墓の彼方まで、つゞくのね。

伸一 さうだとも。

みつ枝 うれしい！

(みつ枝、伸一に再びより添はんとす。ふと、佐原が長い釣竿をかついで小松の中を通つてゐるのが見える)

第二幕

人物

成田 伸一

みづ 枝

佐原 秀雄

(凡て第一幕の人々と同じ、二年だけ年をとつてゐる)

所

相州 逗子

時

現代 (第一幕より二年位過ぎてゐる)

情景 田越川の沿岸に在る成田伸一の家、平屋建、四間位ある。その座敷。假住居と見え、道具などは殆ど見えない。朝十時頃、朝飯の膳が出てある。伸一とみづ枝、さし向ひで飯を喰つてゐる。二人とも第一幕よりは二年丈年を取つてゐる。だが、その倍の年數が経つたと思はれるほど二人とも、ぢむむさくなつてゐる。新婚當時の面影は殆どない。

伸一 もつと、うまい漬物はないかね。

みづ枝 このお茄子、おいしくない。

伸一 毎朝、同じお茄子ぢや、いやになつてしまふね。

みづ枝 どんなものなら、お氣に召して。

伸一 いゝ奈良漬か、……おいしい澤庵か、ほら陶々亭でお茶漬の時に出す、黄色い澤庵……あんなのを喰ひたいな。

みづ枝 そんな贅澤なこと、おつしやつても駄目よ。

伸一 駄目ぢやないよ。もつと、お前が氣をつけてくれよば……。

みづ枝 いくら氣をつけたつて、逗子にはおいしい漬物なんか、賣つてゐないのでありますもの。

伸一 賣つてゐなければ、こしらへればいゝぢやないか。

みづ枝 さうは、いきませんわ。二人切りで、そんな漬物などこさへてゐれば、とても不經濟ですわ。

伸一 漬物が、うまくないと朝飯を喰つた氣がしないよ。

みづ枝 すみません。でも、そんなにおつしやるのなら、東京へいらつしたとき、松屋にでもお寄りになつて、おいしい漬物を買つて来て下さればいゝのに。

伸一 (食後の茶を飲みながら) ふむ。東京に出たときまで、漬物のことを考へてゐちや、たまらないね。

みづ枝 (だまつて食卓の上をかたづけ始める)……。

